

NUIS Journal of International Studies

新潟国際情報大学 国際学部 紀要

【No.3】

April 2018

【第3号】

【第3号】

2018年4月

【Humanities】

- Traditional use of the seaweed, Laminaria, as food around Northeast Asia:
Japan, Korea, China, and the Russian Far East KAMINAGA Eisuke 01
- Translanguaging in the Japanese Tertiary Context:
Student Perceptions and Pedagogical Implications Darlene Yamauchi 15
- Singing Silence on the Planet with Maxine Hong
Kingston's *The Woman Warrior* Yuko Yaguchi 29
- « Research Note »
A Semiotic Study of Pictograms in the Guide Display TANAKA, Atsushi 41

新潟国際情報大学 国際学部 紀要

【人文科学編】

- コンブはどのように食べられてきたのか
東北アジアにおけるコンブ食の歴史 神長 英輔 01
- Translanguaging in the Japanese Tertiary Context:
Student Perceptions and Pedagogical Implications Darlene Yamauchi 15
- Singing Silence on the Planet with Maxine Hong
Kingston's *The Woman Warrior* Yuko Yaguchi 29
- «研究ノート»
案内表示におけるピクトグラムの記号論的考察 田中 敦 41

国際学部 紀要編集委員会

人文科学編

コンブはどのように食べられてきたのか 東北アジアにおけるコンブ食の歴史

神 長 英 輔*

*Traditional use of the seaweed, Laminaria, as food around Northeast Asia:
Japan, Korea, China, and the Russian Far East*

The seaweed, *Laminaria*, is a popular food around Northeast Asia. It had also been used in traditional Chinese medicine, although it did not grow wild in China before the early 20th century. The Chinese word *kunbu* means traditional medicine in Chinese herbalism and is the origin of the Japanese word *kombu* (*Laminaria*).

There are many examples of written references to *Laminaria* as a food in Japanese historical documents, as well as those of Ainu and Nivkh peoples. Traditional *Laminaria* recipes in Japan and Korea seem to have more variety than those in China, suggesting that Japanese and Korean people have used *Laminaria* as a traditional food longer than in China. Russian people began to eat *Laminaria* after capturing their Far East territory along the sea of Japan in the late 19th century. Their *Laminaria* recipes appear similar to Chinese and Korean recipes.

The Japanese have long used *Laminaria* as an important food in ritual ceremonies, but the reasons for this are not clear. Cross-disciplinary studies are required to address this question.

キーワード：コンブ（昆布）、東北アジア、食文化、歴史学、本草学

はじめに

この論文の目的は東北アジアにおけるコンブ食の歴史を明らかにすることだ。この論文は歴史学の研究であり、参考にした情報の多くは歴史資料の調査に基づくものだが、実地調査や現代の料理法も参考にした。

この論文が検討の対象とする地域は日本列島、中国、朝鮮半島、ロシア極東である。現代の国家の枠組みでいえば、日本、中国・台湾、韓国・朝鮮（北朝鮮）、ロシアである。コンブを食べる人々のほとんどはこれらの国々に暮らす人々である。モンゴルも東北アジアの一部であり、私はモンゴルの人々とコンブの接点にも関心がある。しかし、私はモンゴル語を使わず、現時点では参考となる情報が得られなかったため、この論文では論じない。

論文の第1節では、歴史資料に記されたコンブ（昆布）という語の用法を検討する。生物を分類し、定義する知の枠組みは近代とそれ以前では大きく異なっている。そのことを踏まえ、東北

* KAMINAGA Eisuke [国際文化学科]

アジアの各言語においてコンブという語が意味するものを比較する。

第2節では、東北アジアの各地域のうち、中国・朝鮮半島・ロシア極東のコンブ食の過去と現在を歴史資料と現在の見聞から明らかにする。

食は日常の習慣であり、毎日少しずつ変わり続ける。近年の交通手段の発達とインターネットによる情報化はこうした食の変化をより速く大きなものにしていく。

そもそも東北アジアは19世紀半ばから20世紀半ばにかけて、国家の枠組みの変化、資本主義や工業化の発達にともない、大きな人口移動を経験した。これらが人々の食生活に大きな変化を及ぼした。こうした社会の大きな変化はコンブ食の変化のなかにも刻まれた。

第3節では、東北アジアのなかでも、とくにコンブをよく食べる日本列島の人々のコンブ食に注目する。日本人（和人）やアイヌはコンブをさまざまな料理で食べてきた。また、日本人は神事などの儀礼の食の場でもコンブを使ってきた。この節では日本人やアイヌのコンブ食の特徴を明らかにする。

なお、この論文では、生物種としてのコンブも食品としてのコンブもすべてカタカナで表記する。後でも述べる通り、生物種としてのコンブの分類はたびたび変わってきた。また、古くからある中国語の「昆布」という語は必ずしもコンブだけを指すとは限らない。これらの理由から、この論文は「コンブ」という表記を統一して用いる。

1 「昆布」とは何か 歴史資料における「昆布」とコンブ

現代の日本でコンブという名で扱われている食品は、コンブ科のカラフトコンブ属¹に属するマコンブ (*Saccharina japonica var. japonica*) とその近種の加工品である。生物種としての狭義のコンブはコンブ科カラフトコンブ属のマコンブである。興味深いことに、このマコンブは長いことコンブ科コンブ属 (*Laminaria* 属) とされてきたが、21世紀になってからコンブ属 (*Laminaria* 属) からカラフトコンブ属 (*Saccharina* 属) に変更され、それにしたがって学名も変わった。コンブは日本人々にとってなじみのある植物なのに、ごく近年に分類が変わるのだから、植物の分類は難しい。

現代の中国語には「海帯 (haidai)」という語がある。この語は現代日本語のコンブとはほぼ同じ意味で用いられている。つまりコンブ科カラフトコンブ属の各種のコンブを包括しつつ、狭義にはカラフトコンブ属のマコンブを意味する。現代の中国で食品や生物種としてのコンブを指す語としてはこの「海帯」が一般的である。

現代の中国語には「昆布 (kunbu)」という語もある。この「昆布」は、中医 (漢方)、つまり、前近代以来の本草学由来する用語であり、薬としてのコンブを意味する。

韓国語のコンブは「다시마 (tashima)」であり、ロシア語のコンブは「морская капуста (morskaya kapusta)」である。これらは、日本のコンブ、中国の海帯とほぼ同様に使われている。

以上のとおり、話を現代に限れば、コンブに関する語の定義は明快である。生物学における分類の変遷は複雑なもの、食品としてのコンブが指す植物はコンブ科カラフトコンブ属の各種を指して揺るぎない。しかし、時代をさかのぼると話は複雑になる。歴史的にコンブと呼ばれてきた植物は多種多様である。とくに近代以前の「昆布」にはコンブ科カラフトコンブ属以外の種、つまり現在は「コンブ」と呼ばない海藻が含まれている。

コンブの古い和名は「えびすめ」や「ひろめ」である。10世紀初めの深根輔仁 (生没年不詳) の『本草和名』には「和名 比呂女 一名 衣比須女」とある²。

日本の「昆布」(こんぶ)という語は、その発音と表記から明らかなように漢語がもとになっている。8世紀末の『続日本記』には「昆布」という語が記されている。「陸奥国の蝦夷の須賀君古麻比留すがのみこまひるから昆布が献上された」というものである³。文書の内容は、須賀君古麻比留が国府までの遠さを訴え、自らが住む地に近いへのむら閑村(現在の宮城県牡鹿郡ないし旧桃生郡とされる⁴)に郡家(郡の役所)を置いてほしいと願い出たものである。須賀君古麻比留が住んでいた場所は不明だが、現在でもコンブの一種のホソメコンブが牡鹿半島で採れることを考えれば、この「昆布」はコンブだと考えてよいだろう。ただ、『続日本紀』の原文は漢文なので、この「昆布」の読みは明らかではない。

日本の古代の歴史資料に記された「昆布」という語については、蓑島栄紀の代表的な研究のほか、多くの研究がある⁵。各説の詳細には違いがあるが、奈良時代以降の「昆布」が現在のいわゆるコンブ(カラフトコンブ属の各種のコンブ)を指すという点では一致している。

中国でコンブを表す語は時代を追って変わってきた。先にも述べたとおり、中国語の「昆布」とは本草学の用語である。本草学は自然物を薬用に用いるための学であり、薬としての実用的な観点に重点を置いて自然物を分類する学である。したがって、現代の生物学のまなざしからすれば、古い「昆布」の用語法には混乱があるように見えるが、本草学のまなざしからすれば、形態が異なるいくつかの種をまとめて「昆布」と呼ぶことに問題はない。

ミシェル・フーコーは物の秩序を認識するために必要な知の枠組みをエピステーメーという概念で表現した。本草学の「昆布」は本草学のエピステーメーによって定義されている。中国の本草学の集大成である明の『本草綱目』で、著者の李時珍(1518-1593)は「昆布」について次のように記した。これはまさに本草学のエピステーメーを表したものである。

時珍曰く、昆布は、登、萊に生ずるものは搓よって繩索のようにしたものだ、閩、浙に出るものは葉が大きくして菜に似ている。蓋し海中に生ずる諸菜は、性、味が相近く、主たる治療上の効果も大体一樣であって、やや同じからぬ点はあるにしても、やはり大なる差異はないものだ⁶。

本草としての「昆布」の効能は、「痰を切り、固くなっている病変部位を軟化・消散し、水滯(水毒)を改善する」ことにあり、これらの効能を持つとされる海中の植物が「昆布」だったのである。

食文化史家の王賽時は、中国における「昆布」の歴史的な用語法を整理し、中医の「昆布」とは薬用の名称であり、かつては、山東と遼寧では「海带」(アマモ *Zostera marina* 種子植物の海草のヒルムシロ科、現代の中国語では「大叶藻」)、浙江と福建では「黒昆布」(レソニア科カジメ属の一種)、その他の地方では「裙帶菜」(ワカメ *Undaria pinnatifida* アイヌワカメ科ワカメ属)が「昆布」だったと明快に述べている⁷。『本草綱目』も「海带」を「現に登州地方では、これを乾して器物を束ねるに用いている」としている⁸。「海带」がアマモならばこれはつじつまが合う。

古代から朝鮮半島と中国のあいだにはコンブの道があった。『海東繹史』は、朝鮮の韓致滄かんちやう(1765-1814)が中国や日本の書物に著された朝鮮関係の記事を編纂した大著である。この本には「昆布」についての記述が各所にあり、「昆布」が朝鮮(新羅・渤海・高麗)の特産としてたびたび中国にもたらされていたことがわかる。

『海東繹史』26巻には、「昆布今惟出高麗。繩把索地如卷麻。作黄黒色。柔韌可食」,「昆布生新羅者。黄黒色葉細。彼人採得槎之為索。陰乾舶上来中国」と記されている⁹。前者は漢末の『名医別録』

の注釈からの引用であり、後者は唐末の『南海薬譜』の引用である。少なくとも、古代から中国と朝鮮のあいだにコンブのやり取りがあったことがわかる。

『本草綱目』の李時珍も同じ文献を参照していたようで、これとほぼ同じ表現が『本草綱目』にもある。「繩把索地如卷麻」あるいは「採得槎之為索」とは、『本草綱目』の和訳である『国訳本草綱目』によれば、「繩にし東ね括って卷麻のように」したものである¹⁰。

このような形の干しコンブは、今でもコンブの産地であるロシア極東のサハリン州で見ることができる。この東ね方は文書で確認できる限り、少なくとも19世紀以来の伝統ある東ね方である。19世紀末、ロシア極東産の二級品コンブは「直径1フート（約30センチメートル）のぐるぐる巻き」にされていた¹¹。20世紀の半ばまで、ロシア極東のコンブ漁業のおもな担い手は中国人と朝鮮人だった。推測だが、中国や朝鮮に古くから伝わる加工の慣例がロシア・ソ連に伝わっていたのではないだろうか。

宋の徐兢(1091-1153)が1124年に著した『高麗図経』にも「昆布」についての記述がある。『高麗図経』は徐兢が1123年に高麗の開城を訪れたときの見聞を記したものである。記述は「以至海藻昆布。貴賤通嗜」¹²という短いものだが、高麗の人々が「昆布」をよく食べていたことがわかる。この「昆布」はコンブのことだろう。朝鮮半島の中部・北部の日本海沿岸は現代でもコンブの産地である。また、ロシアの沿海地方南部、ウラジオストクの周辺も19世紀から20世紀半ばにかけてはコンブの名産地として知られていた。産地の人々がコンブを食べないと考えるほうが難しい。

明清期になると、朝鮮から多くのコンブが中国に輸出されるようになった。李朝後期、とくに19世紀のコンブは朝鮮の主要な輸出品であり、とくに咸鏡道のコンブが名品とされた¹³。中国でコンブを「海帯」と呼ぶようになったのはこのころである。この時期には日本からも中国にコンブが多く輸出されるようになっていた。これは推測だが、輸入が増えたことで中国の多くの人々がコンブを知るようになり、本草学を離れた、食品としてのコンブを「海帯」と呼ぶようになったのではないだろうか。

江戸期の日本の代表的な百科事典である寺島良安(生没年不詳)の『和漢三才図会』(1712年)は、中国の「昆布」がコンブであると考証している¹⁴。また、日本の本草学の集大成である小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(19世紀初)も、漢籍に記された「昆布」をコンブであるとしている。『本草綱目啓蒙』には「昆布」とは別に「海帯」の項がある。小野は「海帯」をホソメコンブとし、「一名 多士麻」と記している¹⁵。「タシマ」が現在の韓国語でコンブを意味することからすれば、これは、当時の清で「海帯」が朝鮮から輸入されたコンブを指すものになりつつあった状況を裏付けているのかもしれない。

なお、蓑島栄紀は古代中国の「昆布」が「朝鮮半島北東部沿岸を産地として、登州など山東半島にもたらされる北方系ワカメであった」という仮説を出している。蓑島は「『繩で之を把索するに巻いた麻の如し』などとも形容された形態的特徴は(略)寒流系昆布とも齟齬する」¹⁶とし、そのほかにもいくつかの歴史資料を根拠にあげている。ただ、先に述べたとおり、「繩把索地如卷麻」という形のコンブは、今のロシア極東で実際に見ることができ、しかも、その東ね方は19世紀末にさかのぼることができる。蓑島の説は歴史資料にもとづく興味深いものだが、私はさらなる検討の余地があると考え¹⁷。

アイヌはコンブのふるさとに暮らす人々であり、コンブとの付き合いは日本人(和人)以上に長いはずだ。アイヌ語でマコンブを指す語は「コンブ」(北海道の幌別・沙流)と「サシ」(北海

道中北東部・樺太・千島)と「サシキナ」(樺太の真岡)¹⁸である。葦島によれば、これを根拠にしてアイヌ語の「コンブ」が日本語の「コンブ」の語源になったとする説がある一方、日本語の「コンブ」がアイヌ語に入って「コンブ」になったという主張もあるという¹⁹。「コンブ」は「サシ」に比べると分布が狭く、しかもその地域は和人がアイヌにコンブ漁業を行わせていた地域でもある。私は日本語からアイヌ語に「コンブ」が入ってきたという後者の説に説得力を感じる。

現代のロシア極東に暮らす人々の多くはスラヴ系の人々(ロシア人・ウクライナ人)であり、彼らのほとんどはロシア語を話している。彼らは日常的にコンブを食べている。ロシア語でコンブを意味する語は「морская капуста (morskaya kapusta)」であり、これは「海のキャベツ」を意味する。

この語は私が知っている限りでも1880年代以降のロシア語の文献で見ることができる。ロシア帝国が日本海沿岸の沿海州(沿海州は当時の呼称、現在の行政区分としては沿海地方)南部を領土にしたのは1860年である。その後すぐ、この地でロシア人の企業家によるコンブ漁業が始まっているので、「海のキャベツ」という語がロシア語に登場したのは、1880年代からさらにさかのぼり、遅くとも1860年代と考えてよいだろう。

ロシアの名高い言語学者ウラジーミル・ダーリ(Dal', V.I., 1801-1872)の辞典(『生きた大ロシア語の詳解辞典』)の初版(1865年)には、「капуста (kapusta)」(キャベツ)の項目があり、そこに「海のキャベツ、海藻、*Fucus* (ヒバマタ科ヒバマタ属)」とある²⁰。ヒバマタはコンブではないが、褐藻類である。海藻を意味する「海のキャベツ」という語は19世紀半ばにロシア語の語彙に加わったようだ。

1820年代前半に北極海と東シベリアを探検した海軍軍人ウランゲリ(Vrangel', F.P., 1797-1870)の探検記録『シベリアと北極海の探検』(1840年)にも「морская капуста」(海のキャベツ)の語が登場する。ただし、これは北極圏のコリマ川地方に生える草について述べたもので、ウランゲリは「*Crambe maritima*」(アブラナ科クランベ属のハマナの学名)と注釈している²¹。ハマナはヨーロッパで食用にされることがあり、キャベツもアブラナ科である。学名からすると、この語は「海辺に生えるキャベツ」を意味していた。ウランゲリの「海のキャベツ」は現在の「海のキャベツ」にはつながっていない。

日本語とアイヌ語ではコンブを指す固有の語(「ひろめ」「サシ」)があったが、漢語由来の「コンブ」が入り、日本語では「コンブ」が定着した。韓国語の文語では「昆布」という表現がみられるが、現代では「タシマ」が一般に使われている。当の中国では近代になって「海帯」がコンブを指す語として定着した。ここでの韓国語についての検討は不十分だが、それでも、用語の変遷や定着の経緯からは近代に至る貿易の拡大が状況を動かしたことがわかる。

2 東北アジアのコンブ食 1 中国・朝鮮半島・ロシア極東

コンブは東北アジアの特産の海藻である。したがって古くからコンブを食べてきたのは、日本列島、朝鮮半島とその周辺のサハリン島や千島列島、沿海州に暮らしていた人々である。

中国については古くから記録があるにしても、わからないことが多い。現在の中華人民共和国の領土の沿岸部にはもともとコンブが生育していなかった。朝鮮との貿易が盛んになった近代以降の中国東北・華北の人々はコンブを食べていたようだが、それ以前となると、どの地方でどのくらいの人が食べていたのか、はっきりとはわからない。

コンブはどの地域でも主食として食べられてきたわけではないから、文献としての記録が少な

い。また、近代以前は食について多くを語った文献がそもそも少ない。食の歴史があまり語られてこなかったことには思想的な背景がありそうだが、ここでそのことについては触れない。

文献上の記録がなくても、沿海州や朝鮮半島北部のようなコンブが多く採れる地域の人々がコンブを食べていたのは当然のことだろう。先に述べたとおり、新羅から中国にはコンブが輸入されていたし、渤海(698-926年)にとってコンブは重要な交易の品だった。先述の『海東繹史』は『新唐書』ほかからの引用として、渤海の使節が唐や後唐に毛皮や人參(チョウセンニンジン)とともにコンブを献上したことを記している²²。

18世紀後半の朝鮮の史書『渤海考』は、渤海の物産として「南海昆布」をあげている²³。『渤海考』の著者の柳得恭(1749-?)は渤海史を朝鮮史の一部として位置づけようとしていた。その意をくんで読むならば、「南海」は「渤海から見て南の海」、つまり、沿海州沿岸である。ここは今もコンブのふるさとであり、これは沿海州産・朝鮮半島北部産のコンブということだろう。

金(1115-1234)の支配者である女真人もコンブを食べていた。女真人の故地は満洲(中国東北)だったが、金が華北を征服すると、人々は故地を離れて中原に暮らすようになった。こうした女真人の人々の副食は野菜が中心だった。しかし、東北に残った人々の副食は肉や水産物だった。女真人は漁業が得意であり、東北では松花江や黒竜江、日本海の魚に加えてコンブなどの海藻を食べていた²⁴。

先に述べたとおり、明清期には朝鮮から中国にコンブが多く輸出されるようになった。李斗(1749-1817)の有名な『揚州画舫録』にはいわゆる「満漢全席」のメニューが記されている。当時の満漢全席は当時の江浙の官界の宴会料理の一例であり、コースは海鮮料理から始まるのが定番だった²⁵。ここには、ナマコやツバメの巣とならぶ前菜類のなかに「コンブと豚の胃の細切りスープ」が紹介されている²⁶。ただ、これは宴席の料理であり、コンブが庶民の口に入っていたことを示すものではない。

明清期に朝鮮からのコンブの輸出が増えた一因は、漢人の移民によって東北(満洲)の人口が増えたことだったという²⁷。つまり、このころから庶民の口にコンブが入るようになったようだ。

さらに時代が下ると、コンブは中国の庶民の食べものとして記録されている。ロシア極東のユダヤ人実業家、ヤコフ・セミョーノフ(1831-1913)は1860年代にウラジオストクに移住し、沿海州南部とサハリン島でコンブ漁業・貿易業を手がけた。セミョーノフはコンブを清に輸出していた。清の事情に通じていたセミョーノフは、コンブが芝罘(現在の山東省煙台)の市場でスモモや細い麺と物々交換されていたと記している。これが書かれた1880年代のコンブは山東の人々の日常の食べ物だったのだ²⁸。

同じ時期の中国には北海道からも大量のコンブが輸出されていた。農商務省水産局が編纂した『清国輸出日本水産図説』(1886年)は中国のコンブ食事情を次のように記している²⁹。

近時清国人は板昆布を海帯、刻昆布を帯糸といひて獣肉に混煮して嗜好し、(略)北京等に於ては官業に用ゆることなく、多く家常菜のものとするれども、四川等の地にありては刻昆布を五色の菜の一として珍膳に供するものとす(五色菜とは紅色鶏冠草、白色寒天、黒色海參、黄色鮑、青色刻昆布とす)。

この時期の日本の資料によれば、中国では塩分が強く薄葉の道東産ナガコンブが好まれた。ナガコンブは塩の代用として使うことができ、早く煮えたために燃料が節約できることが好まれたのだ³⁰。また、さらに時代が下るが、中国の農民が野菜の端境期にコンブを食べており、

炒め煮として肉ありなし肉なしで食べたり、戻して和え物として食べていたという資料もある³¹。

「コンブを野菜の代用にする」という考え方は現代の中国にも残っている³²。また、沖縄にも「野菜の代わりに食べる」という考え方があり、沖縄の人々は中国と同じようにコンブと肉の炒め煮を好んで食べる³³。沖縄の食と中国の食に深いつながりがあることはコンブの食べ方からもうかがえる。

現代の中国の人々のコンブ料理は上記の19世紀末の延長上にある。東北（満洲）はコンブの産地に近い。この東北の家庭料理を紹介した本には「海带炖凍豆腐」（コンブと凍み豆腐の煮込み）と「海带拌腐竹」（コンブと湯葉の和え物）という料理がある³⁴。また、内陸の四川には19世紀後半から20世紀前半に多くのコンブが輸出されていた。中国を代表する食どころの四川の料理本にも「炆拌海带结」（結び昆布のあえ物、ピーマンや落花生、エビと和えたもの）がある³⁵。私は山東省のコンビニエンスストアでバック詰め「四川風のコンブ和え物」という商品を見たことがある。コンブの和え物は四川の料理としては定番の一つなのだろう。

これらの現代の中華料理の本からうかがえるのは「コンブのだしだけで料理の味を作ることはない」という特徴である。上記のほか、コンブを煮込んだスープもいくつか紹介されているが、いずれの料理も「高湯」（鶏や豚のスープ）などを必ず加えて味を作っているのである³⁶。後に述べるが、日本列島や朝鮮半島の人々はコンブだけのだしで料理をつくるのが少なくない。

こうしただしの使い方の相違は人々とコンブとの付き合いの長短を反映しているのかもしれない。中国の歴史は長い、コンブとの付き合いでは産地である朝鮮半島や日本列島が勝っているということである。

現代の東北アジアに暮らす人々のなかで、中国よりもコンブとの付き合いが短いのはロシア極東のロシア人である。沿海州とサハリン島はロシア帝国が19世紀後半に得た新領土だった。ここへのスラヴ系の人々の移住が進んだのは、ヨーロッパ＝ロシアからの定期航路が就航した1880年代以降である。

沿海州のコンブ漁業は中国人と朝鮮人に担われていたため、コンブと接点があったスラヴ系の人々はサハリン島への移住者だった。19世紀の末、サハリン島の南部ではコンブ漁業が行われ、スラヴ系住民の一部が夏の賃仕事としてコンブ漁業に携わっていた³⁷。イシチェンコはサハリン島の古老に聞き取り調査を行ない、革命前の島の農民の生活の一端を明らかにした。魚のスープ、魚のカツレツ、魚のピロシキなど、彼らは伝統的なロシア料理のなかに魚（サケ・マスほか）をうまく取り込んでいた³⁸。しかし、コンブ料理の話は出てこなかった。コンブ漁業に多くの人が関わっていたのに、それほどコンブを食べていなかったようなのだ。

これ以外では、ハバロフスクで開かれた博覧会（1899年）にコンブのスープが出品されたという記録があるが³⁹、革命前のロシア極東のスラヴ系の人々がコンブをよく食べていたことを示す資料はない。

第一次世界大戦の後、欧米では海藻を工業原料として利用する研究が進んだ。1930年代からはソ連極東でも工業原料や食品としてコンブを利用する研究が進められ、1950年代にはコンブとナマコのトマト煮缶詰が開発された⁴⁰。しかし、これが広く食べられたようすはない。

私自身はこの商品を見かけたことがないが、これを実食したロシア語同時通訳者・作家の米原万里（1950-2006）は次のように記している。少し長いが引用する⁴¹。

まずいといえば「昆布のトマト煮」という缶詰があった。ゴルバチョフ政権末期の極端な物不足のさなかでさえ、スーパーマーケットの閑散とした店に、それだけ大量に売れ残って堆積み上げられているので、

「これはまずいに違いない」

というゆるぎない確信を持って買い求めたのだった。

(略)

ところが、というか、やはり、というか、かなりまずかった。味覚の相違などという生やさしい言葉では片付けられないほど強烈にまずかった。そして、こちらの方も、今は生産ラインからはずされてしまったのか、店頭で見かけなくなった。

この缶詰はまったく受け入れられなかったようだが、コンブそのものは現在のロシア極東で広く食べられている。沿海州でよく見かけるのはコンブのサラダである。これは戻したコンブを細切りにして油で和え、さまざまな調味料を加えた和え物である。サハリン州での定番はコンブのナムル（コンブや野菜の細切りをごま油や唐辛子などで和えた朝鮮料理）である。沿海州ではナムルというよりロシア風のサラダというような薄味である。沿海州には1930年代なかばまで多くの中国人と朝鮮人が暮らしていた。サハリン州には第二次世界大戦後に朝鮮半島への帰国を許されなかった朝鮮人たちの子孫が多く暮らしている。それぞれの地のコンブ料理にはこうした歴史が映し出されているのである。

ロシア極東の先住民はもちろんコンブを食べていた。1809年にサハリン島北部を探検した間宮林蔵は、その地に暮らすニヴフ（当時の呼称ではスメレンクル、ニヴフのアムール方言のニヴフ語の話者）のコンブ食を記している⁴²。

生魚〔鱒・鮭の類〕を水煮し、一器に盛り置き、別にシャシと称する海草〔似昆布者〕（中略）是を以て水煮の魚肉を喰ふ。

これはコンブのうまみをよく生かした料理である。「シャシ」は「サシ」、つまりアイヌ語のコンブに通じる。間宮によれば、彼らはここにキトビル（ギョウジャンニク）やネギのようなものを加えていた。20世紀の樺太のアイヌはこれに似た料理「ラトウシベ」を食べていた。ラトウシベはコンブをだしにサケを炊き、そこにギョウジャンニクと刻んだトロロコンブをのせた汁である⁴³。また、間宮は「ねまりて少しく塩気をなす」とも記している。ニヴフはコンブの粘り気も食感として生かしていたのだ。

文化人類学者の佐々木史郎は「かつてナーナイやウリチは昆布と魚の煮込みスープを最高に美味な料理として食べていたことが知られている」と記している。ナーナイとウリチは沿海州のツングース系の先住民である。コンブのふるさとに暮らしてきた先住民は当然ながらコンブの良さを活かす食べ方を知っていた。

朝鮮の『海東繹史』には、宋の蘇頌（1019-1101）の『図経本草』（1062年、『本草図経』ともいう⁴⁴）の引用があり⁴⁵、そこにコンブ料理の一例が記されている。コンブをコメのとき汁に一晩つけ、白ネギを加えてやわらかく煮て、塩・酢・みそ、そのほかの薬味を加えるというものである。

原文は「高麗昆布臛法」（臛、読みはコクないシカク、あつものの意）なので、これは「高麗

における昆布汁の作り方」とも「高麗産昆布の汁の作り方」とも読める。つまり、これだけではこの料理が朝鮮の料理であるかどうかかわからない。

韓国の食文化史家のユン・ソソク（尹瑞石）はこれを高麗のコンブ料理として紹介している⁴⁶。同じく食文化史家のイ・ソンウ（李盛雨）はこれをワカメ料理としているが⁴⁷、ワカメならばわざわざやわらかく煮る必要はないので、私は「昆布雁」をコンブ料理と考える。

ユン・ソソクによれば、「多士麻」（コンブ）は高麗や李朝の国王に奉じられた食物である「進上品目」に含まれていたという⁴⁸。また、イ・ソンウは18世紀末の料理集である『攷事十二集』を引いて朝鮮の人々がコンブを汁の具や揚げ物にしていた例を紹介している⁴⁹。以上からは高麗以降の朝鮮でコンブが食べられていたことがたしかにわかる。ただ、朝鮮半島の日本海側の北部はコンブの産地であり、歴史資料になくともコンブを古くから食べていたのは確かだろう。

現代の韓国でも多くの人々が日ごろからコンブを食べている。韓国全土の主婦から公募したレシピ集の例を見ると、料理のだしとしての使い方が多いことがわかる。人々はコンブのだしを単独で使うこともあるし、かつおぶしや干しいたけなどと合わせて使うこともある⁵⁰。また、だし以外でも和え物、コンブで野菜を巻いたもの、コンブの粉を調味料に加えるなど、じつにさまざまな料理がある⁵¹。

現代の韓国でのコンブの料理法は、コンブだしを単独で使うことや、だしがらのコンブを巻き物や佃煮にすることなど、日本の料理法に共通するところが多い。日本や韓国でのコンブの使い方は中国での使い方よりも多様である。こうしたコンブ料理の多様性はコンブと人々の付き合いの古さを反映しているように思われる。

3 東北アジアのコンブ食 2 日本列島

コンブのふるさと、北海道・千島列島・サハリン島で暮らしてきたアイヌの食は、日本人の食の影響を受けて近代に大きく変わった。伝統的なアイヌの料理の多くは記録されないまま失われていった。しかし、第二次世界大戦の戦時中、食糧難の時期にアイヌの人々は古くから伝わる食の知恵を生かして苦境を切り抜けた。彼らの伝統的な食は一時的に復活したのである⁵²。

戦後、こうして一時的に復活した料理が聞き書きの調査によって記録された。以下ではそうした調査の成果のうち、浦河のアイヌの例を紹介する。

アイヌの食の中心は汁である。コメを食べない日はあっても汁は毎日食べる。この汁のだしの主役が魚の焼干しとコンブである。アイヌは具を残しても汁は残さない。アイヌは具を食べて汁を残すのを「日本人の食事」といつてきらう⁵³。

アイヌは焼いた（ないし揚げた）コンブを仕上げの調味料としても使う。コンブのうまみを生かす料理の例はコンブシトというコンブだれのだんごである。焼いたコンブをつき碎き、だんごのゆで汁にまぜたものがたれになっている⁵⁴。こうした少ない例からでも、コンブがもつ塩分、だしとしてのうまみ、食感としてのとろみをアイヌがうまく生かしているのがわかる。

日本人（和人）はやはり古くからコンブを食べてきたが、日本人のコンブ食の特徴はハレの日の儀礼にコンブを使うことである。庶民から天皇に至るまでさまざまな儀礼で古くから現代までコンブが使われているのである。

10世紀初めの延喜式「踐祚大嘗祭」の項には「昆布筥四合。別納十五斤」とあり、天皇の即位の大嘗祭でコンブが使われていたことがわかる⁵⁵。延喜式には雑物税として陸奥国からコンブが納められたとも記されているので⁵⁶、この「昆布」がコンブであるのは確かだろう。

昭和天皇の即位時の大嘗祭は、12世紀初めに編纂された儀式的解説書である『江家次第』などに則って行われたが、その際、宮中の賢所にはコンブが御饌みけ（神に捧げる食物は御饌あるいは神饌しんせんと称される）として捧げられた⁵⁷。

宮中祭祀に限らず、各地の神社で御饌としてコンブが供えられる例は多い。現在の各地の神社の神饌は1875（明治8）年に内務省式部寮達を受けて詳細が定められたものが多いが⁵⁸、それに関わらず多くの古社でコンブが使われているのは確かである。

コンブが御饌として使われる例はほかにもある。例えば、地域によっては正月の鏡餅の下にコンブを敷いている⁵⁹。また、新しく作った土俵の地鎮祭である土俵祭り（土俵開き）では、鎮物（しずめもの、またはうずめものという）として土俵中央の穴の中にコンブが埋められる⁶⁰。結婚の結納品としてコンブが使われる地域もある⁶¹。

鏡餅の下にコンブを敷く習慣は「正月鏡の餅」として16世紀半ばの天文年間にさかのぼる。伊勢貞丈（1717-1784）による有職故実書の『軍用記』によれば、「鏡の餅」とは軍神を祀るものであり、鏡餅の下のコンブは御饌としての意味を持っている⁶²。

同じ『軍用記』には、出陣・帰陣の際に、武士がアワビやクリなどともにコンブを食べる習慣が記されている⁶³。このコンブは武士が食べるものなので御饌ではないが、食べ方は細かく定められており、儀礼の食といえるだろう。

また、『料理切形秘伝抄』（1659年）によれば、兵庫にきた朝鮮通信使に対して三方に載せられたのシアワビ、コンブ、かちぐり（干して白でつき殻と渋皮を取った栗）が出されたというから⁶⁴、17世紀半ばにはコンブが戦いの場を外れたところでも儀礼の食として定着していたといえる。

しかし、なぜコンブが御饌として広く使われているのはわからない。御饌としてのコンブについては研究がほとんど見当たらず、今のところ、謎を解く手がかりはない。

先に述べたとおり、朝鮮では季節の食物としてコンブが王に献じられてきたようだが、コンブが神事に使われてきたのかはわからない。現代の中国ではコンブを健康食と見なす例がある⁶⁵。健康の食といえば、不老長寿を説く道教、神仙思想が連想される。古代の中国ではコンブは「東海」の産物として記されてきた。仙境である蓬莱は東海にあることから、「昆布」が神仙思想に何らかの関わりを持っていた可能性もある。しかし、そうした関わりを説く研究は見当たらない。

近代以前の日本人のコンブ食について具体的な料理の内容が記されているものは少ない。南北朝から室町時代に成立した往来物の『庭訓往来』には「コンブが多く取り引きされている」と記されている⁶⁶が、コンブをどのような料理に仕立てているのかは記されていない。

江戸時代になると、さまざまな料理書がコンブを使った料理を紹介するようになった。江戸時代を代表する料理書の『料理物語』（1643年）は、食材としての「第二 磯草之部」と調味料としての「第八 なまだれだしの部」でコンブを取り上げている。

「磯草之部」には「昆布 汁 に物 にあへ くはし むし漬 だしニ油あげ 其外いろいろ」とある⁶⁷。「にあへ」は炒め煮、「くはし」は菓子、「むし漬」は蒸して戻したものをつゆに浸したのだろうか。先にあげた『料理切形秘伝抄』には、まんじゅうやようかん、柿、くるみなどととともに「こぶ」と記されている⁶⁸。コンブは茶の子、つまり茶菓子の定番だったようで、サンショウの実をコンブで包んで干した水辛みずからは江戸時代の菓子としてよく知られている⁶⁹。

『料理物語』の「なまだれだしの部」には「精進のだし」としてコンブがとりあげられている⁷⁰。興味深いのは、コンブ以外の「精進のだし」に現在は「だし」と見なされていないものが

あげられていることだ。「かんへう」（かんぴょう）や「ほしかぶら」「干大根」はともかくも、「ほしたで」（「干し蓼」か）や「もちごめ ふくろに入る」などは意外である。ここには「右之内 取合よし」とあり、これらのだし汁を互いに組み合わせることが勧められている。

『和漢三才図会』には「昆布の煮汁はたいへん甜く、鱈の煮汁と比べることができる」とある⁷¹。砂糖が高価だっただけに、当時の人々にとってコンブは「甘かった」のである。当時の人々の味覚は現代の私たちのそれより繊細だったようだ。そう考えると、さまざまな食べものの煮汁をだしとみなしたことや、コンブが茶菓子の定番だったことに合点がいく。

日常の食べものとしてのコンブの料理法は江戸時代にすでに完成されていた。また、縁起物としてコンブを食べる習慣も江戸時代に定着していたのである。しかし、その一方で、コンブが儀礼の食の場で使われるようになった由来はよくわからない。

『和漢三才図会』には「和名が嘉^{よろこぶ}の字の訓みに似ているからであろうか」とある⁷²。また、『軍用記』も「よろこぶといふ心なり」としている⁷³。たしかに語呂合わせはコンブが縁起物として庶民がひろく食べるようになった経緯をよく説明している。しかし、先で見た通り、遅くとも平安時代にはコンブが宮中の神事に使われており、当時のコンブは「ひろめ」あるいは「えびすめ」と呼ばれていた。この時代の神事で使われていた理由を語呂合わせで説明することはできない。

御饌にはコンブ以外の海藻も多く供えられている。儀礼の場においてコンブが意味するものを明らかにするには、コンブの食をより広い文脈に置いて考える必要がある。例えば、神話が手かがりになる。海のなかの生き物が日本の神話のなかでどのように機能していたかを考え、また、同時に他の食べものが御饌のなかでコンブとどのような関係を取り結んでいたのかを神話を手がかりに考えるのである。そして、もし可能ならば、朝鮮やアイヌの人々の神話や儀礼の食のあり方や、神仙思想におけるコンブの意味をあわせて検討することが望ましい。

おわりに

中国における「昆布」とは本草学の概念だった。「昆布」は薬としての効用をもとにした定義であり、植物としての形態や生態をもとにした定義ではなかった。コンブはもともと中国沿岸に自生していなかったため、近代以前の中国では必ずしも広くコンブが食べられていたわけではなかった。時代を追うごとに「昆布」がコンブであることは東アジアの各地域でおおまかに了解されていったが、そもそも「昆布」は本草学の概念であり、植物としての「昆布」の厳密な定義は近代までなされなかった。したがって東アジアの古い文書に記された「昆布」が意味するところには揺れがある。ただ、少なくとも日本では奈良時代以降の「昆布」は明らかにコンブを指しており、日本の文書からはコンブについての多くのことがわかる。

文書から得られる情報は多くのことを私たちに教えてくれるが、文書がすべてではない。現代の私たちのまわりにも文書を読み解く鍵は転がっている。コンブの料理法や加工法は時代による変化を受けつつも、昔から変わっていない点も多い。料理法や加工法から見えてくるものがある。

例えば、コンブの干し方である。先にも記した通り、現代のロシア極東における干しコンブの形は19世紀末の文書に記された通り、直径30センチメートルほどに巻いたものである。これは『本草綱目』でも引用された古い文書に記された加工法そのものである。

日本列島の各地ではコンブが神事や儀礼の食に使われており、これもコンブと日本列島の人々との付き合いの古さを示すものである。また、朝鮮や日本、アイヌの人々はコンブだけをだしとした汁を飲むが、中国の料理にそういう例はない。日本やアイヌの人々はコンブを菓子としても

食べる。料理としての種類の多さ、使い方の多様さも、コンブと人々の付き合いの長短を示しているように思われる。

コンブをよく食べる日本では、コンブに関係する食文化史の研究が多くなされてきた。しかし、それらのほとんどは日本列島の和人の文化のなかで完結した研究である。

今後の課題は明らかである。コンブの原産地であり、長い利用の文化を持つ朝鮮とアイヌとの比較研究が必要である。また、日本のさまざまな儀礼のなかで食品としてのコンブが果たしている記号的な意味、機能を明らかにすることが必要である。コンブは精進料理に欠かせない食べ物でもある。日本の宗教におけるコンブの意味はもっと研究されてよい。

食文化は人々が簡単に乗り換えられるものではない。食は日々繰り返される実践であり、変化も激しいが、なかなか変わらないことも多い。変わらない実践のなかには遠い昔の習慣がそのまま伝わっているものもあり、そうしたものが歴史を読み解く鍵になる。コンブをよく知るためには過去の知と現在の知をさまざま方法で比較検討する必要がある。

¹ この論文では *Saccharina* 属の和名をカラフトコンブ属と表記する。なお、本文で述べた分類変更の際に従来の *Saccharina* 属の和名を「コンブ属」と改称した例もある(国立科学博物館「日本の海藻 美しく多様な海藻の世界」[<http://www.tbg.kahaku.go.jp/research/database/seaweedworld/html/kaisou-list/konbu-list.html#hosomekonbu>] 2018年1月7日閲覧)。

² 深江輔仁著、正宗敦夫編纂校訂『本草和名』現代思潮社(覆刻日本古典全集)、1978年、[三十六ウ]。

³ 直木孝次郎他訳注『続日本紀 1』平凡社(東洋文庫457)、1986年、168-169頁。

⁴ 直木『続日本紀 1』194-195頁。

⁵ 蓑島栄紀『「もの」と交易の古代北方史 奈良・平安日本と北海道・アイヌ』勉誠出版、2015年ほか。

⁶ 李時珍著、白井光太郎校註、鈴木真海訳『頭註 国訳本草綱目 第六册』春陽堂、1934年、517-518頁。

⁷ 王赛时, 山东海带的历史演变与当代烹饪 [J]. 美食研究, 2014 (4).2.

⁸ 『頭註 国訳本草綱目 第六册』515-516頁。

⁹ 朝鮮古書刊行会編『海東釋史 一』朝鮮古書刊行会(朝鮮群書大系20輯)、1911年、(卷二十六)561頁。

¹⁰ 『頭註 国訳本草綱目 第六册』517-518頁。

¹¹ Кириллов Н.В. Морские промыслы южного Сахалина. Отчет общества изучения Амурского края за 1898 год. Владивосток, 1899. С. 11-12.

¹² 朝鮮古書刊行会編『渤海考 北興要選 北塞記略 高麗古都徴 高麗図経』朝鮮古書刊行会(朝鮮群書大系15輯)、1910年、(高麗図経 第二十三卷 雑俗二)493頁。

¹³ 王, 山东海带的历史演变与当代烹饪. 2. 이철성, 「연행(燕行)의 문화사; 조선 후기 연행무역과 수출입 품목」, 『한국실학연구』 제20호, 2010, 48-49면.

¹⁴ 寺島良安著、島田勇雄他訳注『和漢三才図会 17』平凡社(東洋文庫527)、1991年、308-309頁。

¹⁵ 小野蘭山『本草綱目啓蒙 2』平凡社(東洋文庫536)、1991年、114頁。

¹⁶ 蓑島『「もの」と交易の古代北方史』257頁。

¹⁷ 現代の山東半島は中国における代表的なワカメの産地である。ワカメの産地であれば、海の向こうの朝鮮からワカメを輸入する動機は弱いように思われる。ただ、古代の山東にワカメがなかった可能性もある。ワカメは船の底に付くことで、近代以降、急速に世界中に広がった侵略的外来種でもある。

¹⁸ アイヌ民族博物館「アイヌと自然 デジタル図鑑 アイヌ語辞典」[http://www.ainu-museum.or.jp/siror/dictionary/detail.php?book_id=P0464] 2018年1月7日閲覧。

¹⁹ 蓑島『「もの」と交易の古代北方史』309頁。

²⁰ Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. Ч. 2. М., 1865. С. 705.

²¹ Врангель Ф. П. Путешествие по северным берегам Сибири и по Ледовитому морю, совершенное в 1820, 1821, 1822, 1823 и 1824 г. экспедициею, состоявшею под начальством флота лейтенанта Фердинанда фон-Врангеля. СПб., 1841. С. 209.

²² 朝鮮古書刊行会編『海東釋史 二』朝鮮古書刊行会(朝鮮群書大系21輯)、1911年、(卷三十四)114頁、125頁。

²³ 朝鮮古書刊行会編『渤海考』(渤海考)53頁。

²⁴ 崔广彬, 金代女真人饮食习俗考 [J]. 学习与探索, 2001 (2). 131-132.

²⁵ 逸鸣, 解密满汉全席 [J]. 海内与海外, 2006 (4). 73-74.

- ²⁶ 逸鳴, 解密满汉全席 [J]. 72.
- ²⁷ 이철성, 「연행 (燕行) 의 문화사」, 49 면.
- ²⁸ *Высоков М.С.* Комментарий к книге А.П. Чехова “Остров Сахалин”. (Сообщение о морской кацусте // Владивосток: общественная-литературная и морская газета. №№47-48. 1885.) Владивосток, Южно-Сахалинск, 2010. С. 432.
- ²⁹ 河原田盛美著、増田昭子編、高江洲昌哉、中野泰、中林広校注『沖繩物産誌 附・清国輸出日本水産図説』平凡社 (東洋文庫 859)、2015年、149頁。
- ³⁰ 東京高等商業高校編『北海道輸出昆布調査報告書・支那輸出羊毛調査報告書』東京高等商業学校、1906年、88-91頁。
- ³¹ 「清人昆布料理法」『殖民公報』64号、1912年、88頁。
- ³² 例えば、楊盛龍. 吃在成都 [J]. 美食, 2004, 2: 49.
- ³³ 河野友美編『新食品事典 5 野菜・藻類』真珠書院、1992年、143頁。
- ³⁴ 由能力主編. 新編東北家常菜 [M]. 北京: 金盾出版社, 2011. 231-232, 234.
- ³⁵ 名師文化生活編委會編. 川菜王 888 [M]. 沈阳: 辽宁科学技术出版社, 2010. 240.
- ³⁶ 例えば、吳昊天, 吳杰主編. 新編精品粵菜 [M]. 北京: 金盾出版社, 2010. 56.
- ³⁷ 神長英輔「コンブの道 サハリン島と中華世界」『ロシア史研究』88号、2011年、68頁。
- ³⁸ *Ищенко М.И.* Русские старожилы Сахалина. Южно-Сахалинск, 2007. С. 242.
- ³⁹ *Смирнов Е.Т.* Приамурский край на Амурско-приморской выставке в 1899 г. в городе Хабаровске. Хабаровск, 1899.
- ⁴⁰ *Гайл Г.И.* Освоение растительных богатств дальневосточных морей. РГАЭ (Российский государственный экономический архив). ф. 410. оп. 2. д. 1196. л. 11. (Документы РГАЭ по теме “Природные ресурсы и экономическое развитие Дальнего Востока, о. Сахалина и Камчатки, 1917-1970-е гг”. Токио, “Наука”. 1996).
- ⁴¹ 米原万里『旅行者の朝食』文藝春秋、2002年、39頁。
- ⁴² 間宮林蔵述、村上貞助編、洞富雄、谷沢尚一編注『東韃地方紀行 他』平凡社 (東洋文庫 484)、1988年、82頁。
- ⁴³ 萩中美枝ほか『日本の食生活全集 48 聞き書アイヌの食事』農山漁村文化協会、1992年、151頁。
- ⁴⁴ 『図経本草』は『本草図経』ともいう (王少麗「蘇頌と『図経本草』」『日本医史学雑誌』第41巻第2号・通巻1478号、1995年、255頁)。
- ⁴⁵ 『海東繹史 一』(巻二十六) 562頁。
- ⁴⁶ 尹瑞石著・佐々木道雄訳『韓国食生活文化の歴史』明石書店、2005年、378頁。
- ⁴⁷ 李盛雨『韓国料理文化史』平凡社、1999年、434頁。
- ⁴⁸ 尹瑞石『韓国食生活文化の歴史』441-442頁。
- ⁴⁹ 李盛雨『韓国料理文化史』435頁。
- ⁵⁰ 緑色連合編『自然がいっぱい韓国の食卓』自然食通信社、2011年、41頁、205頁、207頁。
- ⁵¹ 緑色連合編『自然がいっぱい韓国の食卓』55頁、81頁、151頁。
- ⁵² 萩中ほか『日本の食生活全集 48』3頁。
- ⁵³ 萩中ほか『日本の食生活全集 48』94頁。
- ⁵⁴ 萩中ほか『日本の食生活全集 48』133頁。また、さとうち藍『アイヌ式エコロジー生活 治造エカシに学ぶ、自然の知恵』小学館、2008年、186頁。
- ⁵⁵ 黒板勝美、國史大系編修會編『國史大系 交替式 弘仁式 延喜式前篇 新訂増補』吉川弘文館、1972年、(延喜式 巻七 神祇七 踐祚大嘗祭) 150頁。
- ⁵⁶ 黒板勝美、國史大系編修會編『國史大系 延喜式 中編 新訂増補』吉川弘文館、1972年、(延喜式 巻二十三 民部下) 592頁。
- ⁵⁷ 八東清貫「神饌と饗膳」雄山閣編『食物講座 第15巻』雄山閣出版、1938年、40頁、42-43頁。
- ⁵⁸ 齋藤ミチ子「神々の食膳」國學院大學日本文化研究所編『東アジアにみる食とところ 中国・台湾・モンゴル・韓国・日本』おうふう、2004年、306頁。
- ⁵⁹ 河野編『新食品事典 5』143頁。
- ⁶⁰ 「土俵祭りの『うずめもの』とは」『相撲』23巻13号・通巻324号、1972年、163頁。
- ⁶¹ 河野編『新食品事典 5』143-144頁。
- ⁶² 今泉定助原編、故実叢書編集部編『改訂増補 故実叢書 21巻』明治図書出版、1993年、(軍用記) 304頁。
- ⁶³ 故実叢書編集部編『改訂増補 故実叢書 21巻』(軍用記) 289-291頁。
- ⁶⁴ 吉井始子編『翻刻江戸時代料理本集成 第一巻』臨川書店、1978年、(料理切形秘伝抄) 170頁。
- ⁶⁵ コンブと豆腐はよい食べ合わせの定番である (例えば、民間食物諺語 [Z]. 果衣之友, 2008, 3:49.)。また、「虚寒」体質の人のコンブの連用は禁忌である (例えば、中医中药 [Z]. 老友, 2006, 2: 64.)。
- ⁶⁶ 佐竹昭広ほか編『新日本古典文学大系 52 庭訓往来・句双紙』岩波書店、1996年、(庭訓往来四月

十一日状 返信) 35-36 頁。

⁶⁷ 吉井編『翻刻江戸時代料理本集成 第一巻』(料理物語)、6 頁。

⁶⁸ 吉井編『翻刻江戸時代料理本集成 第一巻』(料理切形秘伝抄)、159 頁。

⁶⁹ 河野編『新食品事典 5』141 頁。

⁷⁰ 吉井編『翻刻江戸時代料理本集成 第一巻』(料理物語)、12 頁。

⁷¹ 島田他訳注『和漢三才図会 17』309 頁。

⁷² 島田他訳注『和漢三才図会 17』309 頁。

⁷³ 故実叢書編集部編『改訂増補 故実叢書 21 巻』(軍用記) 289 頁。

Translanguaging in the Japanese Tertiary Context: Student Perceptions and Pedagogical Implications

Darlene Yamauchi *
Toyo University

Abstract

Although much research has been conducted into how languages interact in social practice in multilingual contexts, little understanding exists how this interaction affects learning particularly in the Japanese tertiary context. This study offers insights into the benefits of translanguaging as a tool to increase learner interest in Language led Content and Language Integrated Learning (CLIL) or Soft CLIL classes. Sample classroom activities will be presented to illustrate strategic L1 usage and within instruction. This will be followed by qualitative results in the form of student comments from an open-ended questionnaire administered to small sample of Japanese first year university students demonstrated that strategic L1 usage appeared to increase learner interest in topics covered in Soft CLIL classes. As results were preliminary future studies increasing sample size or adding a quantitative research may offer more definitive information with regard to the benefits of translanguaging in this specific CLIL context.

Key words: translanguaging, Content and Language Integrated Learning (CLIL), active learning, learner autonomy

1. Introduction

The Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology recommendations have strongly supported the goal of active learning as a methodology for successful language learning (MEXT 2011,2014). Indisputably, successful active learning is achieved when students have an interest in the subject matter they are studying, unfortunately this has not been seen as the case in Japanese tertiary contexts as most students surveyed still find English classes uninteresting and difficult (Ohmori, 2014). One issue that has been marginalized but may prove to be powerful tool in this dilemma is the usage of Japanese (L1) in learning English (L2).

In recent years there has been a great amount of research conducted with regard to how languages interact in social practice in multilingual contexts. (Adamson and Coulson, 2014) but yet little understanding exists how this interaction affects learning particularly in the unique Japanese tertiary context. The most often cited reason for this is generally English language programs have traditionally separated languages, viewing bilinguals as “two monolinguals in

* Darlene Yamauchi [非常勤講師, 東洋大学専任講師]

one” (Gallagher, and Collohan, 2014). In the last decade this philosophy has been challenged, opening up space for *translanguaging* - the use of languages to achieve communicative goals in educational and social contexts to scaffold negotiation of meaning.

Instrumental in understanding this innovative concept is literature indicating the “shuttling” between languages to improve comprehension of language as well as content for the promotion of active learning (Canagarajah, 2011).

The current study discusses the preliminary results from an intrinsic, small-scale case study focusing on the benefits of translanguaging as a tool to increase learner interest in a first year soft-CLIL cohort at a Japanese University (n=63) The literature review will provide an overview of CLIL methodology, and translanguaging highlighting the connection between content and language in the Japanese tertiary context. Utilizing an originally designed open-ended questionnaire as a methodology to target impressions of L1 usage during classes. preliminary results of the benefits of translanguaging will be presented. Additionally instructor observations will also be offered to further explain and triangulate the data collected. A discussion of the practical interventions within the current syllabus will be proposed as a means of improving learner, promoting learner autonomy as well as encourage student engagement in class. To conclude the limitations of this study and implications for further research will be suggested.

2. Literature Review

2.1 Content and Language Integrated Learning (CLIL)

Forms of instruction that include both content teaching and language teaching are not a novel concept. Various methodologies such as Content-based instruction (CBI) English for Specific Purposes (ESP) and immersion education, which have been widely adopted in North American contexts may be viewed as precursors to CLIL (Brinton, Snow, & Wesche 1989; Lyster, 2007).

Content and Language Integrated Learning (CLIL) has many similarities to CBI in that a second language is taught through content subjects. The main differences between the two models are the instructional goals and the learners. In CBI, the goal is to prepare English learners for successful participation in the English-medium curriculum; or English speaking environments such as the case when the learners are from immigrant families speaking a variety of first languages or in homogenous populations such as Japan (See figure 1). CLIL instruction strives to prepare students by developing their skills and talents in using the target language in an academic setting as well as to equip students with the linguistic skills needed to participate in the global economy (Dalton-Puffer, 2011).

Language of Learning

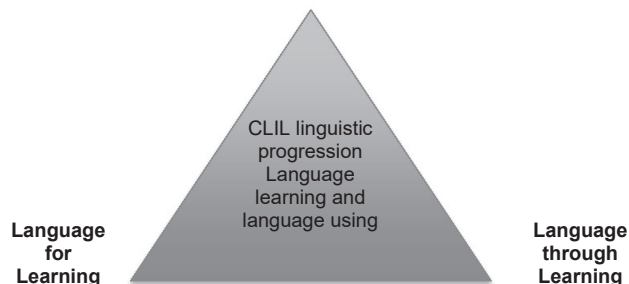


Figure 1. The Language Triptych (Coyle et al. 2010)

2.2 CLIL's 4 C's

The aims of CLIL are to improve both the learners' knowledge and skills in a subject, and their language skills in the language the subject is taught through. Language is used as the medium for learning subject content, and subject content is used as a resource for learning the language. The specific intrinsic aims for CLIL are summarized in terms of Coyle's (2007) 'four Cs'. They may be determined as follows: communication viewed as improving overall target language competence; content while learning the knowledge and skills of the subject; culture which builds intercultural knowledge and understanding and finally cognition and the development of thinking skills (see figure 2).

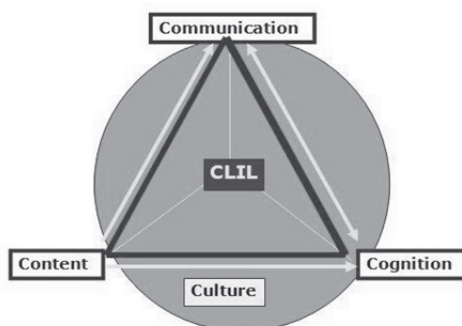


Figure 2 'four Cs of CLIL (Coyle 2007)

2.3 CLIL and Japanese Context

Although arguably contextually both CBI and CLIL may appear similar and be difficult to distinguish, as both approaches effectively increase students' linguistic competence and confidence, motivation, and awareness about cultures and global citizenship (Mehisto, Marsh and Frigols, 2008, Coyle, 2007). CLIL appears to offer more flexibility in its methodology allowing for a hybridity of practice (Ikeda, 2013). These features have been found to match the learning needs of Japanese students as well as the needs of stakeholders mandating the production of successful global citizens (MEXT, 2014).

2.4 Soft CLIL

The term Soft CLIL is often used interchangeably Language-driven approaches (see figure 2) as both are concerned with teaching and learning that is focused *primarily* on language (Ikeda, 2013) Generally these courses are placed on the language curriculum in university programs desiring greater use of subject-based content. The Soft CLIL approach has *language learning* as its basic objective and is most often taught by language professionals and quite often the assessment is found to be weighing more on language acquisition as opposed to content knowledge as seems to be the trend with appearing in Japanese tertiary context (Ohmori 2014).

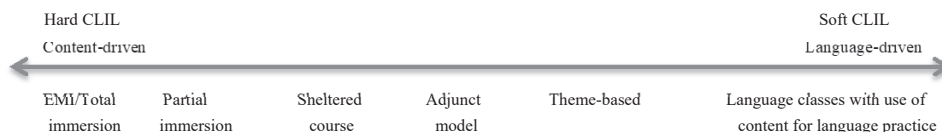


Figure 2 Met's (2009) continuum

2.5 L1 as a tool in Soft CLIL Instruction

The use of Japanese (L1) in English (L2) instruction is quite often found with opinions divided. Early methodologies such as the Direct Method are viewed as having had a great impact on the Education Policy in Japan to the point that monolingual instruction has been mandated by MEXT(2011) in order to increase students' exposure to English, through the use of English to strongly encourage students with incomprehensible input. Unfortunately, quite often stakeholders decision to employ monolingual English instruction for pedagogical reasons that are generally, based on unsound assumptions encourage an unbalanced teacher-student relationship, which as Yonesaka (2008) notes leads to the indication of linguistic imperialism as the classroom where students are unwilling to participate actively in classes or will not speak out of fear of embarrassment. Research conducted in settings similar to the Japanese context where L1 is found dominant sheds light on the fact that monolingual instruction is unnecessary and potentially detrimental and perhaps the strategic use of L1 in instruction facilitate learning (Adamson.et.al, 2014). The utilization of L1 in the classroom specifically in soft CLIL contexts and has been found to be very effective in bilingual training and may be a successful tool lower proficiency learners (Lasagabaster, 2013). The ability to use L1 in these contexts may ease the discomfort teachers feel when teaching more than language while dealing with unfamiliar content in language lessons (Ball, Kelly, & Clegg, 2015). In fact researchers report that forbidding L1 in CLIL classrooms may cause hostility among students and be detrimental to learning (Gallagher & Colohan , 2014).

2.6 Translanguaging

In recent years Translanguaging has become a popular concept to describe and analyze language practices that occur in varied learning environments (García and Menken 2010). The

Welsh word *Trawsieithu* translated into the English term *translanguaging* where it was a term used to describe an instructional practice observed in Welsh classrooms (Williams, 1996). Specifically, in the Welsh context the teacher would attempt to teach in English, the students would respond in English and *visa versa* with the language choice being reversed while the teacher offers explanations in English.

Although these techniques or behaviors are by no means considered unusual and often used routinely in language learning contexts albeit quite often perceived unfavorably, Williams argued these processes aided in maximizing the students as well as the teachers linguistic knowledge while at the same time augmenting problem solving skills. This practice may have the propensity to empower students and dissipate the negative stereotypes previously associated with the use of L1 in classroom instruction thus improving the learning experience that surpasses language learning for all stakeholders (Crease and Blackledge 2015). Through strategic classroom language planning that combines two or more languages in a systematic way within the same learning activity, *translanguaging* seeks to assist multilingual speakers in making meaning, shaping experiences, and gaining deeper understandings and knowledge of the languages in use and even of the content that is being taught (Blackledge & Takhi, 2014).

2.7 Translanguaging versus Code switching

Translanguaging has been compared to *code switching* in that it refers to multilingual speakers' "shuttling between languages" naturally (Canagarajah, 2011). Although the term *translanguaging* often appears alongside *code switching* within the literature the difference becomes apparent in the ideology of the two theories (Crease et.al, 2015). *Code-switching* assumes that the two languages of bilinguals are two separate monolingual codes that have the propensity of usage without reference to each other. Alternatively, *translanguaging* suggests that bilinguals have *one linguistic repertoire* from which they deliberately choose features to communicate effectively. That is, *translanguaging* takes as its starting point the ways in which *language is used by bilingual people as the norm*, and not the abstract language of monolinguals, as described by traditional usage books and grammars as suggested by *code-switching*.

In this respect, *translanguaging* differs radically from the concept of *code-switching*, as it implies a compartmentalization of languages an viewpoint that the languages of a bilingual speaker are divided into two isolated systems that have the ability to be separated and regulated in time and space (Canagarajah, 2011). It is important to note that alongside *translanguaging* and *code-switching* other similar concepts such as, *heteroglossia*, *metrolingualism* and *translingual practice* (Canagarajah, 2011) represent a shift in the ideology of language, acting as precursors to the concept of languages seen as social constructs, and not merely separate systems (García & Flores, 2013). When considering language practices from this perspective the main emphasis turns to the language user and on how languages are negotiated in interaction rather than the language systems (Canagarajah, 2011).

2.8 Active Learning in the Japanese Context

Japanese research into active learning originates from the 1990s American Engineering and other science-related programs where students in these programs voiced frustration over instructional methodology relying mostly on lectures as the delivery method and as such lacked hands on learning opportunities (Imoto, 2013). The term active learning has recently become a buzz word in Japanese Educational context as stakeholders are seeing the benefits of moving instruction away from a high reliance on lecturing, and toward a new mode of educational dissemination which involves a greater degree of engagement of students (Tickle, 2014). Active learning is observed students are actively engaged with the content of the course and with each other in ways that promote long-term understanding and utilize critical thinking skills. Additionally active learning is witnessed in contexts where the goals and outcomes of the course are known to students and assessment is formative designed to inform both students, instructors and stakeholders with reflective practices. As students are viewed as active participants heavily engaged in the learning process, assessment within active learning framework equips learners with metacognitive skills that will in turn inform teachers in order to make timely changes to facilitate learning This methodology is viewed as in sync with CLIL methodology but contrasts with the traditional Japanese educational model of students as passive participants memorizing items in order to pass the next high-stakes test (Smith, Sheppard, Johnson, & Johnson, 2005).

3. Research Question

The purpose of the current research is to ascertain the presence of benefits or deterrents in applying translanguaging activities in Soft CLIL classes with the following research question:

Does the incorporation of translanguaging activities in Soft CLIL classes increase student interest in the Japanese Tertiary context?

4. Method

4.1 Research Context

The purpose of the current research is to investigate translanguaging in Soft CLIL for the promotion of active learning. The current study draws on data obtained from conducted in a small private university in Northern Japan. The participants (n=63) consisted of Information Science students enrolled in a second year compulsory soft CLIL course placed on the language curriculum. The sample is considered to be at the same lower English Language level based on a placement test taken upon entrance to the university.

The instructor is native English speaker with advanced Japanese ability and a very good knowledge of the content covered in the course. The sample for this study was chosen based on the fact that the researcher taught all of the students in this cohort offering the most convenient access. All participants consented in writing prior to start of this study and

completed questionnaires voluntarily.

4.2 Instrument and Procedures

A questionnaire designed in English with a Japanese translation was provided and the students were encouraged to answer the open-ended questions in either language as hopefully this would allow for more freedom of expression in answers and less overall stress for the students. All students responded in Japanese. The questionnaire consisted of five closed-ended questions with five predetermined responses followed by an open ended question in order to gain insight into the reasoning behind the closed ended answer (see appendix 1 for an example question). The questionnaires were distributed at the end of class and were administered a total of 10 times during a 15 week period. A general explanation of the questionnaire was provided as well as a reminder that the students' answers would be completely anonymous in an effort to prevent anxiety or stress as well as to promote candid responses (Armstrong, 2009). There was no time limit for completion of the questionnaire but all questionnaires were completed within 10 minutes.

5. Results and Discussion

5.1 Student Impressions

Table 1 presents the students opinions with regard to the benefit of L1 usage by the instructor or student during class time. Preliminary results indicate that students found the use of L1 during class beneficial in every class evaluated and based on these results no students perceived the use of L1 detrimental in this study . Further investigation of specific L1 would be useful and may be further explained in student's comments to open ended questions (see in Appendix 2). Overall student comments portrayed a positive opinion of L1 usage with comments about ease of activity completion. Comments such as the usefulness of being permitting to use Japanese resources may indicate a potential for an increase in content knowledge. Furthermore comments that students researched topics outside of class time indicates the possibility of the development of learner autonomy. Certainly comments from students signaling there enjoyment of enjoy the classes were encouraging as this is an entry point to active learning (Smith et.al, 2005).

It is of interest to note that some students may have been moved out of their comfort zone with comments such as: "At first it felt strange to be able to speak Japanese in English class but with the time limit we could get more information easily and finish the assignment on time." and "I usually cannot be happy in groups because my English is poor but I enjoyed class today" which may indicate a change in students learning views and a movement toward active learning as result of L1 and translanguaging. Although comments such as "Japanese time was too short" or "Japanese time should be longer" were recorded, these would be expected as the instructor was hesitant about the time that should be allotted for solely L1 usage. Although this is a common dilemma among instructors when employing translanguaging (Canagarajah, 2011) based on student's comments perhaps more L1 time may

be permitted in the future as this may further aid in scaffolding necessary content (Mehisto, 2008).

5.2 Translanguaging in Group Work

Researchers have commented that learners often feel it is much easier to talk to their peers in their L1 when working in groups and Japanese students are no exception (Gorsuch, 2000). Historically the use of L1 in this context has been viewed as a barrier to learning but the reality may be the use of the L1 by the students when confronting problems posed by the L2 actually creates favorable conditions for language acquisition and linguistic reflection. With the awareness that the strategic use of L1 as a resource for academic learning not as previously thought, an interference or an obstacle, will enable both parties as well as stakeholders to recognize the benefits of translanguaging and L1 usage (Canagarajah, 2011).

Cooperative-learning (CL) has been suggested as an effective teaching strategy in lessons targeted at more difficult content matter particularly as within the group structure there may be many opportunities afforded to use strategic L1 in order to. In CL, students work together in small groups on a structured activity. The group members are individually accountable for their work, and the work of the group as a whole is also assessed (Johnson & Johnson, 1999). Cooperative learning permits opportunities for language development by allowing students to use groups a natural environment to learn English therefore increasing independence from the teacher as well as promoting learner autonomy. (Yamauchi, 2015).

The most utilized teaching approach within CL is the Jigsaw approach (Jacobs, Power and Loh, 2002). In the jigsaw approach to instruction, the target material is divided, usually into four parts, and distributed to small groups to learn. The students are permitted to use Japanese in gaining understanding about the content but must in the end must present their findings in English. As there is a time limit the students are aware that L1 usage must be limited (Yamauchi, 2015). In this activity a reading passage is divided into four sections, labeled A-D. The students with the same lettered passage make a group for a designated period of time. When the time is up the homogeneous groups having mastered their material, regroup into heterogeneous groups to present material and complete a task, during this part of the activity L1 may also be employed. the then put 4 sections of the passage into order. This activity concentrates heavily on peer teaching and group problem solving therefore the added tool of L1 during cooperative learning activities proved beneficial for all students but in particular lower level students.

Table 1 Student's Opinion Evaluation of the benefits of L1 (Japanese) usage during Class

Week	Attendance N=	Evaluation (%)				
		Strong agree	Agree	Neither	Disagree	Strong disagree
1	63	96.8	3.2	0	0	0
2	63	95.2	4.8	0	0	0
3	62	96.8	3.2	0	0	0
4	63	98.4	1.6	0	0	0
5	63	96.8	3.2	0	0	0
6	61	98.4	1.6	0	0	0
7	62	96.8	3.2	0	0	0
8	58	96.6	3.4	0	0	0
9	62	98.4	1.6	0	0	0
10	63	95.2	4.8	0	0	0

6. Conclusions and Future Implications

The current study discussed the preliminary results from an intrinsic, small-scale case study focusing on the benefits of translanguaging as a tool to increase learner interest in a first year soft-CLIL cohort at a Japanese University. The use of translanguaging highlighted the connection between content and language in the Japanese tertiary context. An originally designed open-ended questionnaire as a methodology was administered 10 times in order to target student impressions of L1 usage during CLIL classes. Preliminary results reported that all students felt that L1 was beneficial for learning in this context. With increased language practice aided by L1 usage students reported more interest in the subject matter, less stress in L2 usage, and to a certain degree learner autonomy with unassigned English learning activities completed by students outside of class. Although results are preliminary this study as an acceptable tool for language learning in As results were preliminary future studies increasing sample size or adding a quantitative research may offer more definitive information with regard to the benefits of translanguaging in this specific CLIL context.

References:

- Adamson, J.L. & Coulson, D. (2014). Pathways towards success for novice academic writers in a CLIL setting: A study in an Asian EFL context. In Al-Mahrooq, R., Thakur, V. S. & Roscoe, A. (Eds.) *Methodologies for Effective Writing Instruction in EFL and ESL Classrooms*. (pp. 151-171). Hershey, PA: IGI Global.
- Armstrong, T. (2009). *Multiple intelligences in the classroom (3rd edition)*. Alexandria: ASCD.
- Ball, P., Kelly, K., & Clegg, J. (2015) *Putting CLIL into Practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Blackledge, A., Creese, A., & Takhi, J. K. (2014). Beyond multilingualism: Heteroglossia in practice. In S. May (Ed.), *The multilingual turn* (pp. 191-215). New York, NY: Routledge.
- Brinton, D. M., Snow, M. A. and Wesche, M. B. (1989). *Content-based Second Language*

- Instruction*. Boston: Heinle and Heinle Publishers.
- Canagarajah, A. S. (2011). Translanguaging in the classroom: Emerging Issues for research and pedagogy. *Applied Linguistics Review*, Vol. 2, 1-28.
- Coyle, D. (2007). "Content and Language Integrated Learning: Towards a Connected Research Agenda for CLIL Pedagogies" . *The International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*,10 (5), 543-562.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010) Content and Language Integrated Learning. Cambridge: Cambridge University Press.
- Creese, A. & Blackledge, A. (2015). Translanguaging and Identity in Educational Settings. *Annual Review of Applied Linguistics*, 35, 20-35.
- Creese, A., & Martin P. (2008). Classroom ecologies: A case study from a Gujarati complementary school in England. In A. Creese, P. Martin, & N. H. Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of language and education: Vol. 9. Ecology of language* (2nd ed., pp. 263-272). Boston: Springer Science+Business Media.
- Cummins, J. (2005). A proposal for action: Strategies for recognizing heritage language competence as a learning resource within the mainstream classroom. *Modern Language Journal*, 89, 585-592.
- Dalton-Puffer, C. (2007). *Discourse in content and language integrated learning (CLIL) classrooms*. Amsterdam: John Benjamins.
- Dalton-Puffer, C. (2011). Content-and-language integrated learning: from practice to principles? *Annual Review of Applied Linguistics* 31: 182-204.
- Gallagher, F. & Collohan, G. (2014). T(w)o and fro: using the L1 as a language teaching tool in the CLIL classroom. *The Language Learning Journal*. 1-14. DOI:10.1080/09571736.2014.947382
- García, O., & Flores, N. (2013). Multilingualism and common core state standards in the United States. In S. May (Ed.), *The multilingual turn: Implications for SLA, TESOL, and bilingual education* (pp. 47-166). New York, NY: Routledge.
- García, O., & Menken, K. (2010). Stirring the onion: Educators and the dynamics of language policies (looking ahead). In K. Menken & O. García (Eds.), *Negotiating language policies in schools: Educators as policymakers*. (pp. 249-261). New York, NY: Routledge
- Gorsuch, G. J. (2000). EFL Educational Policies and Educational Cultures: Influences on Teachers' Approval of Communicative Activities. *TESOL Quarterly*, 34(4), 675-710.
- Ikeda, M. (2013). Does CLIL work for Japanese secondary school students?: Potential for the 'weak' version of CLIL. *International CLIL Research Journal*, 2(1), 31-43. Retrieved January 17, 2018 from <http://www.icrj.eu/21/article3.html>
- Imoto, Y. (2013). Japan: Internationalization in Education and the Problem of Introspective Youth. In P.-t. J. Hsieh (Ed.), *Education in East Asia* (pp. 127-152). London, UK: Bloomsbury
- Jacobs, G. M., Power, M. A. & Loh, W. I. (2002). *The teacher's source for cooperative learning*. Thousand Oaks, CA: Corwin Press.
- Johnson, D. W., & Johnson, R. (1999). *Learning together and alone: Cooperative, competitive, and*

- individualistic learning* (5th Ed.). Boston: Allyn & Bacon.
- Lasagabaster, D. (2013). The use of the L1 in CLIL classes: The teachers' perspective. *Latin American Journal of Content and Language Integrated Learning*, 6(2), 1-21.
- Levine, G. S. (2011). *Code choice in the language classroom*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Lyster, R. (2007). *Learning and Teaching Languages Through Content: a Counter-Balanced Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Mehisto, P.; Marsh, D.; Frigols, M. J. (2008). *Uncovering CLIL. Content and Language Integrated Learning in Bilingual and Multilingual Education*. Oxford: Macmillan.
- Mehisto, P. (2008). CLIL Counterweights: Recognising and decreasing disjuncture in CLIL. *International CLIL Research Journal*, 1(1), 93-119.
- Met, M. (2009). Content-Based Instruction: Defining Terms, Making Decisions. *NFLC Reports*. Retrieved January 17th, 2018 from: <http://www.carla.umn.edu/cobaltt/modules/principles/decisions.html>
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2011) Five Proposals and Specific Measures for Developing Proficiency in English for International Communication.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2014). Report on the future improvement and enhancement of English Education (Outline): Five Recommendations on the English Education Reform Plan Responding to the Rapid Globalization. Retrieved February 17, 2017 from: <http://www.mext.go.jp/english/topics/1356541.htm>
- Ohmori, A. (2014). Exploring the Potential of CLIL in English Language Teaching in Japanese Universities : An Innovation for the Development of Effective Teaching and Global Awareness. *The Journal of Rikkyo University Language Center (立教大学ランゲージセンター紀要)* 32, 39-51.
- Smith, K. A., Sheppard, S. D., Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (2005). Pedagogies of engagement: Classroom-based practices. *Journal of Engineering Education*, 94(1), 87-101.
- Swain, M. (1983). Bilingualism without tears. In M. Clarke & J. Handscombe (Eds.), *On TESOL '82: Pacific perspectives on language learning and teaching*(pp. 35-46). Washington, DC: TESOL.
- Tickle, L. (2014). Have big university lectures gone out of fashion? *The Guardian*. Retrieved February 17, 2018 from <http://www.theguardian.com/education/2014/apr/08/university-lectures-blended-learning>.
- van Lier, L. (2008). The ecology of language learning and sociocultural theory. In A. Creese, P. Martin, & N. H. Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of language and education: Vol. 9. Ecology of language* (2nd ed., pp. 53-65). Boston: Springer Science+Business Media
- Williams, C. (1996). Secondary education: teaching in the bilingual situation. In C. Williams, G. Lewis & C. Baker (Eds.) *The Language Policy: Taking stock* (pp.193-211). CAI, Llangefni.
- Yamauchi, D. (2014). Self-evaluation of learner's multiple intelligences in an undergraduate ESP

Program for nurses at a Japanese university. *The Journal of Teaching English for Specific and Academic Purposes*, 2(4), 591-602.

Yamauchi, D. (2015). Redesigning a Japanese Tertiary Communicative EFL syllabus: Integrating Multiple Intelligences. *Asian EFL Journal*, February (90) 66-86.

Yonesaka, S. M. (2008). Students' language learning beliefs, proficiency, and L1- dependence. *Hokkai Gakuen University Studies in Culture*, 39, 239-263.

Appendix 1 Example question from Student Translanguaging Questionnaire

Check the statement that most describes your opinion. Then explain your response in more detail.

1. Being permitted to use Japanese was helpful in the completion of today's activity.

____ Strongly agree

____ Agree

____ Undecided

____ Disagree

____ Strongly disagree

Please explain your response in more detail.

Appendix 2 Sample Comments from students

- We were able to complete the work faster.
- My English is low so Japanese helps me.
- My English ability is low so I was happy to use Japanese.
- The class was fun.
- I didn't look at the clock.
- Working together was easier than I thought.
- I felt comfortable.
- I could understand well because Yamauchi Sensei gave us information in Japanese too.
- This subject is new to me so I was happy to have help from my friends but Japanese time was too short.
- Japanese time should be longer.
- Using Japanese homepage was good.
- I checked out the website after class.
- I want to learn more about fish farming problem.
- At first it felt strange to be able to speak Japanese in English class but with the time

limit we could get more information easily and finish the assignment on time.

- I usually cannot be happy in groups because my English is poor but I enjoyed class today.

Singing Silence on the Planet with Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*

Yuko Yaguchi*

Abstract

Kingston's *The Woman Warrior*, although highly controversial, holds an exceptional seat of canon in Asian American literature. This paper firstly surveys how the work has instigated "the pen wars" in Asian American literature, and makes a comparison with Alice Walker's *The Color Purple*, gender and ethnicity as crucial issues. It then takes a closer look at two of the five stories in *The Woman Warrior*, "No Name Woman" and "A Song for a Barbarian Reed Pipe," paying attention to the problematics of language and silence. It argues that the no name woman, the speaker's aunt who jumped into the family well with a new-born illegitimate baby half a century ago in China, is not a subaltern who could not speak, but a suicide bomber who turned her (dead) body into a site of woman/writing, a speaker and warrior at once. In the final section it examines the life of an ancient woman poet Ts'ai Yen, a symbol of female gender that Spivak calls "the most global institution with the longest history." While succumbing to a series of outrageous fates as wife and slave, she becomes a translator between "barbarians" and "barbarians," and sings "a chant that could hardly be discerned from silence."

Keywords: Asian American literature, autobiography, women, gender, ethnicity

We belong to the planet now, Mama.

Maxine Hong Kingston

We live with ghosts or spirits all around us, they are a sense of history that bonds all of us...For we too are simply ordinary people with a universe passing by us and through us.

David Mas Masumoto

Canon or Crucible?

Maxine Hong Kingston's first work, *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts* (1976), arguably holds an exceptional seat of canon in Asian American literature, which prides itself on a rich and diverse body of works. The Modern Language Association acknowledges *The Woman Warrior* as "the most widely taught work by a contemporary writer on college campus today,"¹ and selects it in *Approaches to Teaching World Literature*,

* Yuko Yaguchi [国際文化学科]

the series to encourage literary education in the undergraduate level; its 148 products as of today include thirty-three single author titles of American literature, among which eleven are by women writers, six African American, and only one Asian American. The fact seems to endorse the recognition that Kingston is not only “the most influential Asian American writer of the twentieth century,” but also “one of a select few ‘disciplinary brand names’ in academia alongside with Chaucer, Milton, and Shakespeare.”²

On the other hand, however, *The Woman Warrior* is believed to have brought “the pen wars” to Asian American literature,³ leading Elaine H. Kim to call it “a crucible for Asian American issues.” Kim also suggests that at the back of all these clamorous pros and cons lies the fact that Kingston is “the first and, until recently, the only canonized Asian American writer in the English language.”⁴

Written in the heated and fluid nexus of social transformations taking place in the late twentieth-century America, *The Woman Warrior*, when reread on the twenty-first century global stage, seems to be enveloped in even more layers of ambiguity and density. This paper aims to discuss its problematics of silence and language, mainly focusing on “No Name Woman” and “A Song for a Barbarian Reed Pipe,” the first and last of its five stories. Before entering the work itself, however, let us take an overview of the history of “a crucible.”

Gender and Ethnicity in the Crucible

“You must not tell anyone,” my mother said, “what I am about to tell you.” (3)⁵

So begins “No Name Woman,” the first story of *The Woman Warrior*. It strikingly resembles the opening sentence of Alice Walker’s *The Color Purple* (1982): “You better not tell nobody but God. It’d kill your mammy.”⁶

They are the words of prohibition: “Don’t tell,” one from a mother to a daughter, the other from a father to a daughter. Later revealed in *The Woman Warrior* is the (erased) existence of the father’s sister who jumped into a well with her new-born illegitimate baby; in *The Color Purple*, what would “kill your mammy” turns out to be a rape of the daughter by the father-in-law. Voicing violation of taboo, one committed in a family in the Confucian China and the other in the racially segregated American South, forms another taboo of forcing the daughters into silence. The two daughters, however, decline not to tell, and transform themselves into speaking women, providing the authors with major literary awards, as well as harsh criticism from male authors of authority in their communities. The male authors condemn the female authors for exposing their own communities and men of kin to public disgrace, and in so doing position racism before sexism. Frank Chin, who deems individual pain as “the expression of ego” and “psychological attitudinizing”⁷ and as deserving to serve political purposes, may have been ignorant of the motto of the second wave feminism: “The personal is political.” The twin-like works by the two women writers of minority and responses to them make one aware once again of complexity and hierarchy existing between gender and ethnicity.⁸ Considering the fact that another writer Chin criticizes severely is David Henry Hwang, who

in *M. Butterfly* (1989) depicts a gay actor of the Beijing opera, one is to assume that sexuality can also be an issue here. It is too obvious and universal a construct within which minorities among minorities are lambasted.

Chin also bases his criticism of *The Woman Warrior* on its ambiguity between fact and fiction as well as that of genre. Although the work bears as its subtitle “Memoirs of a Girlhood among Ghosts,” readers will realize immediately that it might as well be called autobiographical fiction. The author herself admits that she wrote it as a novel, but that she was advised by an editor to present it as nonfiction, for the first work of fiction by a young writer often hardly sells.⁹ The strategy may have worked; it won the National Book Critics Circle Award for nonfiction. The fact itself points to the ambiguous nature of the work that plays on hybridity of reality and fantasy. Serious-minded Chin, however, was furious, insisting that Kingston writes not Chinese American history but “the fake China.”¹⁰ For Kingston, however, “the truest book of American history” is William Carlos Williams’s *In the American Grain*, in which female-impersonating Abraham Lincoln walks the fields of the Civil War,¹¹ and her ambition is to write history as mythical truth.¹² Chin considers *The Woman Warrior* as a descendant of the Christian tradition of autobiographical literature and labels it as accommodating itself to a white readership; he may have also been unfamiliar with how autobiography as a genre has come to play a significant role in women’s literature since the late sixties.¹³

Kingston, born and brought up in the United States, admits: “It’s about my imaginary China that I write.”¹⁴ and challenges Chin when she subtitles *Tripmaster Monkey* (1987) “His Fake Book,” which some consider to be her response to Chin’s criticism.¹⁵ *The Woman Warrior* and *China Men* (1980) tell the stories/histories of Chinese Americans from female/male point of view respectively. Yet bearing in mind that the Chinese America had long been a male-dominated, bachelor society, the former may play a more substantial role in filling in gaps of their history. It echoes Willa Cather’s effort when she, in *O Pioneers!* (1913), let women’s voices heard in the history of pioneering the West, which had been overwhelmingly *his* story.

No Name Woman

Tell/Don’t Tell

We acknowledged earlier that there is a semblance in the opening passages of *The Woman Warrior* and *The Color Purple*, in which the narrators are forced not to speak. But there is a crucial difference: while in the latter, the rapist father-in-law imposes silence on the victimized daughter, in the former the mother, telling the daughter not to tell, communicates women’s tragedy to her:

Don’t let your father know that I told you. He denies her. Now that you have started to menstruate, what happened to her could happen to you. Don’t humiliate us. You wouldn’t

like to be forgotten as if you had never been born. (5)

This admonition may sound in accordance with gender norms of patriarchy/feudalism/Confucianism; yet it can also be interpreted as a critique of, and a resistance against her husband who denies the life of his sister, or as a revenge, if one follows the work's creed that to report is to avenge. Moreover, it warns the daughter who experiences her first menstruation what danger a woman's body can entail to herself, and welcomes her who enters "women's time" in the women's bond.

The narrator's mother, Brave Orchid, says that she found the no name woman and her baby stuck in the family well the day after the baby was born. The narrator, on the other hand, questions her mother's remark, wondering how she could be there when she didn't live with her sister-in-law. The narrator is often confounded by her mother's "talk-story" that fluctuates between truth and lie. Should it be true, however, her mother had been the first witness of a suicide. While "No Name Woman" foregrounds "the female body with the indelible mark of trauma,"¹⁶ witnessing violence exercised upon woman's body should also be a traumatic experience. A nation shares traumatic memories, which is one of the main themes of *The Woman Warrior*; at the same time, gender, which Spivak calls "the most global institution with the longest history,"¹⁷ has its own traumatic memories. From rape, incest, adultery, foot-binding, the imposition of silence, to the equivalence between wife and slave, the book is filled with traumatic memories of female gender—as Fa Mu Lan's back is covered with words, waiting to be told. The narrative structure, in which the mother relays a story to the daughter, is evident in the last episode of the book; yet in fact one is to notice that it is the differentiation of the first episode. The narrator's female hero/woman warrior is not only Fa Mu Lan but also Brave Orchid, her own mother, unreliable speaker and "champion talker" (202); or rather, more the latter than the former.¹⁸ The daughter astutely observes that the mother's "'Don't tell' means 'Tell,'"¹⁹ and tells five stories of her own. Readers may be invited to speak on, inspired by the author's artifice, who later slips in a jazz jargon in the subtitle of *Tripmaster Monkey: His Fake Book*.²⁰

The Body as Woman/Writing

The "no name woman" became pregnant while her husband is long away from home in the Gold Mountain, another name of America. She gave birth to the baby in a pigsty on her own, without betraying the name of the baby's father or anything that led up to the illegitimate birth. Villagers in white mask broke down her house, killed livestock, and robbed, crying out "Pig." "Ghost." "Pig" (5). She jumped into the family well the next day with the new-born baby in her arms. Ever since, she has had her name erased, her existence denied, and suffered punishment called oblivion.

As Gayle Sato names her "Hester Prynne's sister,"²¹ human society, East or West, will not forgive a woman trespassing the border of matrimony. Unlike her American sister who dares to live with a sign of adultery and a new life in her bosom, however, can this woman, in

choosing silence and death, be nothing but a subaltern who cannot speak in the end, a loser?

In her revised essay on “subaltern,” which since its publication in 1988 has created considerable controversy and one of the key concepts of postcolonial-feminist critique, Gayatri C. Spivak refers to a young Indian girl’s suicide as an attempt “to ‘speak’ by turning her body into a text of woman/writing” and an act to rewrite sati, widow self-immolation.²² The girl, involved in the independence movement in India, rejected to kill for the sake of ideology, and chose to kill herself instead, having waited for menstruation so as to avoid misunderstanding that she had been engaged in an illegitimate passion. In so doing, Spivak suggests, the girl denounced the institution binding female sexuality and rewrote sati that forbids a widow to commit suicide during menstruation. Could we assume, then, that the no name woman, by jumping into the family’s drinking water, turned her body as well as her baby’s into text and made a manifest attack on the family (and its institution), and that, in other words, she was a suicide bomber, speaker and warrior at once?

Although the narrator of *The Woman Warrior* is sometimes called “Ho Chi Kuei” whose meaning is unknown,²³ her name is never revealed in the book. As if in response to Virginia Woolf’s declaration that anonymity runs in women’s blood,²⁴ the narrator identifies herself as another no name woman, her aunt “my forerunner” (8), and devotes pages to her beyond fifty years of neglect and silence.

My aunt haunts me. (16)

As Shakespeare’s sister is for Woolf and Bhubaneswari is for Spivak, for this no name Chinese American girl, her aunt who killed herself in China fifty years ago is definitely the fundamental source of inspiration. Haunted, she conjures up her aunt’s soul in the act of mourning, which lies at the core of her speaking and writing.

Memory, Imagination, Creation

The girl imagines the life of her aunt, whom she has never seen in reality or photograph, but only heard of through her mother—in other words, whose existence cannot be proven. Was she an ordinary woman or an outrageous romantic? While saying that it is hard to imagine her aunt as sexually liberated, she also points out that her aunt left her family for a man’s scant charm. Did she meet him in the fields or market? Hoping on one hand that the man her aunt loved was not “just a tits-and-ass man,”(9) she suggests on the other hand a possibility of a rape or an incest. She imagines the pain and solitude of giving birth alone in a pigsty, her aunt’s love and adoration of the baby who slept like a piglet, full of milk. It must have been a baby girl, for a boy may have been forgiven. The narrator keeps imagining the life and person of her aunt whose memories are lost to eternity, in layers and layers of details—the act worthy of the name of creation. Jacques Le Goff, a historian in the Annales School, calls for attention the relationship between memory and imagination as well as memory and poetry, referring to the fact that the Latins generally said “to memorize”

when they meant “to imagine,” and that in the Greek mythology, the Muses, the goddesses of imagination, are the daughters of Memory.²⁵ Kingston herself admits: “Memory is artistic”²⁶ and introduces a Vietnam veteran’s comment: “Writing, you change. And you change the world, even the past.”²⁷

Even more noteworthy is that Kingston’s effort as author to make the best of her imaginative/creative capacity in portraying her aunt’s life-stories can be considered to represent/reproduce the history of Chinese Americans when they passed through Angel Island. Their history tells us that the 1906 San Francisco earthquake and its subsequent fires burned down much of public records of identification, thereby enabling numerous illegal immigrants to claim citizenship, and also letting “paper sons” to rush from China to the United States, with versions of fictional life-stories in their heads. As Kingston suggests: “that’s the way narration and memory and stories work in our culture. So, that’s a gift given to me by our culture,”²⁸ the Chinese American history might be the motley texture of fiction and reality interfered and interwoven with each other.

A Song for a Barbarian Reed Pipe

Cutting the Tongue

The World of *The Woman Warrior* is loaded with violence. On a community/nation level, Fa Mu Lan fought in a war as a substitute for her father; the narrator was born and raised in the midst of the century of warfare, from the World War Two, the Korean War, to the Vietnam War; in the communist China her uncles were executed; her aunts had their thumbs twisted off and drowned themselves. If we believe with Judith Butler that “[i]t is precisely because one is mired in violence that the possibility of non-violence emerges,”²⁹ are we supposed to be veterans of war in order to discipline ourselves as veterans of peace?

Depicted is a variety of violence committed upon women. Battered with verbal violence such as “Girls are maggots in the rice.” “It is more profitable to raise geese than daughters.” (43), the narrator thrusts herself on the floor and cries out. She is particularly confounded with her mother’s remark that the latter cut the former’s tongue in her childhood. She does not remember the incident; she sees no trace of scar in the frenum, watching it closely in the mirror with her tongue curled up. One may remember that in Sam Shepard’s movie *The Silent Tongue* (1993), a native American woman is raped after her tongue being cut out so that she would not scream. Cutting of a tongue not only deprives one of a speaking ability but can be interpreted symbolically as female genital mutilation, a most cruel act if done by mother to daughter. However, when asked by the narrator if she did it because they say in China, “a ready tongue is an evil” (164), her mother replies that she did it so that her daughter would not be tongue-tied and pronounce any sound.³⁰ To make her mute or eloquent? It is ambivalence as cruel as “a cruel knot” (163), as if telling not to tell in order to tell and let tell.

When she entered kindergarten and had to speak English that she had not mastered, the narrator kept silent for a whole year and failed, and got a zero IQ in the first year at

elementary school. The way she feels “[a] dumbness—a shame—still cracks my voice in two” and struggles to speak “American-feminine” (165; 172) reminds one how difficult it can be to acquire voice and language, even for the second-generation immigrants. The narrator curses, drags hair, pinches a cheek of a girl who never utters a word except when she recites in class, in a vain effort to make her speak. The narrator is not only a victim but also a perpetrator of violence on women, in a similar manner that the mother called on her sister in China to come and face her husband who kept another family in America, and ended up bringing insanity and death to her sister. Implied behind it is that the mute girl is a double, a shadow of the narrator, as Moon Orchid and Brave Orchid have “faces like mirrors.” (118)

The mother and daughter engage themselves in a desperate verbal battle. The daughter reproaches the mother: “You lie with stories.” “I can’t tell what’s real and what you make up” (202); the mother curses the daughter for being “Ho Chi Kuei” who cannot distinguish between reality and falsity, truth and lie. The daughter leaves home, searching for a world without darkness and ghosts, filled with light and logic in every hole and corner. The mother might have wanted to tell the daughter, as Virginia Woolf did in front of female students at Cambridge: “Lies will flow from my lips, but there may perhaps be some truth mixed up with them; it is for you to seek out this truth and to decide whether any part of it is worth keeping.”³¹ The daughter herself must have known better than anyone else that a line between light and darkness, truth and lie, language and silence, sanity and insanity can be extremely thin, for she recollects that she “enjoyed the silence” (166), and she covered pictures with black paint because it was “so black and full of possibility,” it was a picture of a moment before curtains rise, underneath the black curtains brilliant operas (165).

Song almost like Silence

A coda to “A Song for a Barbarian Reed Pipe” as well as *The Woman Warrior* is a story of another woman warrior - speaking woman, introduced by the mother and finished by the daughter. It is a story of Ts’ai Yen, a woman poet born in A.D. 175 as the daughter of a renowned scholar. Captured at the age of twenty by a nomadic people of the Southern Hsiung-nu, she served during her twelve years of captivity as a mounted warrior and gave birth to two children by the chieftain. (While the no name woman delivered a baby in a pigsty, Ts’ai Yen experienced her labor on the sand.)

The barbarians made nock-whistles by slipping feathers and arrow shafts into reeds. When the arrows whistled in battle, the weapons became musical instruments and terrified their enemies with high whirling whistles, “filling the air with death sounds.” Then one night when the sand was shining gold under the moon, hundreds of barbarians sat on the sand and played the flutes. The songs of the flutes, soaring sharp and cold, penetrated Ts’ai Yen’s heart like “an icicle in the desert” (208), who, disturbed and pained, also sang a song so high and clear, a song about her family in China. The barbarians did not understand the Chinese language, but understood the sorrow and anger of a wandering soul and felt “they could catch barbarian phrases.” Twelve years later, Ts’ai Yen was ransomed and married a man whom

her father chose so as to carry on the Han lineage. One of the songs she brought back from the savage land, "Eighteen Stanzas for a Barbarian Reed Pipe," came to be sung widely to Chinese instruments. "It translated well," the end of the story reads (209).

The fate of Ts'ai Yen is the fate of women who can only grow up to be wife or slave, as the narrator used to hear as a girl, and as one sees every day in newspaper articles on human trafficking. Ts'ai Yen, the slave woman poet-warrior who dared not become a runaway slave, however, became a mediator between "barbarians" and "barbarians," and transformed sorrow into song. She may also bridge silence and language, mother tongue and other tongues, life and death, and so forth. Probably it is not enough to "name the unspeakable" (5). The task of a poet would not only be to give a voice to silence, but to keep wandering (like a ghost) between silence and language, to engage herself/himself in "an incessant shuttle that is a 'life',"³² and while wandering, to sing "a chant that could hardly be discerned from silence."³³ As Mahasweta Devi writes in her account of a non-literate society of native Indians,³⁴ stories will then become songs, songs will be written in the history, whereby they will resonate throughout the planet to which we belong.

¹ Laura E. Skanadela-Trobley, introduction, *Critical Essays on Maxine Hong Kingston* (New York: G. K. Hall, 1998) 2.

² Helena Grice, *Maxine Hong Kingston* (Manchester: Manchester UP, 2006) 17.

³ *Ibid.*, 18.

⁴ Elaine H. Kim, "Such Opposite Creatures: Men and Women in Asian American Literature," *Michigan Quarterly Review* 29 (1990): 79.

⁵ Maxine Hong Kingston, *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts* (New York: Knopf, 1976) 3. References to the novel are to this edition hereafter, and are included parenthetically in the text.

⁶ Alice Walker, *The Color Purple* (Orlando: Harcourt, 1982) 1.

⁷ Frank Chin, "This Is Not an Autobiography," *Genre* 58 (1985): 112.

⁸ Kingston points out that Chin befriends Ishmael Reed, a stern criticizer of Walker, and mentions: "[A]ny little thing we do to them will destroy their manhood even worse because they are already so fragile" (Skenazy and Martin 184). It is also noteworthy that the two criticized women writers joined the anti-war march on the International Women's Day in 2003, got arrested and shared a cell as inmates, and that Walker produced a documentary film entitled *Warrior Marks*, another crucible of pros and cons.

⁹ Skenazy and Martin 2.

¹⁰ Chin, "The Most Popular Book" 28.

¹¹ Skenazy and Martin 39.

¹² It will be worthwhile to remember the discussions of Toni Morrison, who emphasizes the importance of "rememory" when black America reconstructs the memory of slavery, and of Michel Foucault, who asserts the significance of "counter memory" for a subject of resistance.

¹³ Kingston reports: "There's a lot of people who've told me that I've written their diaries" (Skenazy and Martin 46). It is exactly the same as what Anaïs Nin, supposedly the most well-known diarist in the twentieth century, reveals after her *Diary* was published in 1966.

¹⁴ Skenazy and Martin 8. The 2017 Nobel laureate, Kazuo Ishiguro, makes a strikingly similar comment about his novel *An Artist of the Floating World*: "I think the Japan that exists in that book is very much my own personal, imaginary Japan." See "Wave Patterns," *Grand Street* 38 (1991): 75.

¹⁵ Kingston says in her interviews: "It's like him sending me hate mail, and I send him love letters," and "I don't want to honor him with answers" to his blatant, even personal slanders (Skenazy and Martin

- 81; 202), thus expressing her ambivalent feelings toward him.
- ¹⁶ Jennifer Griffiths, "Uncanny Spaces: Trauma, Cultural Memory, and the Female Body in Gayle Jones's *Corregidora* and Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*," *Studies in the Novel* 38.3 (2006): 354.
- ¹⁷ Gayatri Chakravorty Spivak, *Other Asias* (Malden: Blackwell, 2008) 254.
- ¹⁸ Fukuko Kobayashi, in discussing *The Woman Warrior* and *The Joy Luck Club* by Amy Tan, points out that the narrators in the two Chinese American works suffer from conflict with their mothers, and establish their own identity not so much through a separation from their mothers as acknowledging a tie with them. See *Gender to Ethnicity de Yomu America Josei Bungaku: Shu-en kara Kyokai e* [Reading American Women Literature through Gender and Ethnicity: From Marginality to Boundary]. Tokyo: Gakugei-shorin, 2006) 157.
- ¹⁹ Kingston, *Through the Black Curtain* (Berkeley: The Friends of the Bancroft Library, U of California, 1987) 5.
- ²⁰ "Fake Book" is a collection of musical sheets containing basic melodies, chords, and lyrics, which construct a base of free improvisation. Kingston, in choosing the subtitle, intended to write only the beginning of a story, letting readers finish it (Skenazy and Martin 204-5). Another suggestion of Kingston's that "[t]he talking women start their best gossip with 'Don't tell'" (*Through the Black Curtain* 5) echoes with the opening of Toni Morrison's *The Bluest Eye*, "Quiet as it's kept." (*The Bluest Eye* [London: Picador, 1993] 3).
- ²¹ Gayle K. Fujita Sato, "Ghosts as Chinese American Constructs in Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*," *Haunting the House of Fiction: Feminist Perspectives on Ghost Stories by American Women*. Ed. Lynette Carpenter and Wendy K. Kolmar (Knoxville: U of Tennessee P, 1991) 198.
- ²² Gayatri Chakravorty Spivak, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of Vanishing Present* (Cambridge: Harvard UP, 1999) 308.
- ²³ According to a Chinese American critic Chia-rong Wu, "Ho Chi Kuei" can be roughly translated as "ghost-like." ("Ghosting America: Cross Cultural Shadows in Maxine Hong Kingston's Memoirs." *Interactions* 20.1-2 [2011]: 168.)
- ²⁴ Virginia Woolf, *The Room of One's Own* (London: Grafton, 1988) 50.
- ²⁵ Jacques Le Gogh, *History and Memory*. Trans. Steven Rendall and Elizabeth Claman (New York: Columbia UP, 1996) 86.
- ²⁶ Kingston, *Hawai'i One Summer* (Honolulu: U of Hawai'i P, 1987) xvii.
- ²⁷ Kingston, *The Fifth Book of Peace* (New York: Vintage, 2004) 266.
- ²⁸ Skenazy and Martin 74.
- ²⁹ Judith Butler, *Frames of War* (London: Verso, 2010) 171.
- ³⁰ Jeehyun Lim, in discussing language and body in *The Woman Warrior*, reports that the tongue-cutting custom can be seen in the present-day South Korea, the nation which is known to be passionate about English education. See "Cutting the Tongue: Language and the Body in Kingston's *The Woman Warrior*." *Melus* 31.3 (2006).
- ³¹ Woolf 6.
- ³² Spivak, "Translation as Culture," *An Aesthetic Education in the Era of Globalization* (Cambridge: Harvard UP, 2012) 241.
- ³³ Kingston, *China Men* (New York: Knopf, 1980) 122.
- ³⁴ Mahasweta Devi, "Petrodactyl, Puran Sahay, and Pirtha," *Imaginary Maps*. Trans. Gayatri Chakravorty Spivak (New York: Routledge, 1995) 95-196.

Works Cited

- Butler, Judith. *Frames of War*. London: Verso, 2010.
- Chin, Frank. "This Is Not an Autobiography," *Genre* 58 (1985): 109-30.
- . "The Most Popular Book in China." *Maxine Hong Kingston's The Woman Warrior: A Casebook*. New York: Oxford UP, 1999. 23-28.
- Devi, Mahasweta. "Petrodactyl, Puran Sahay, and Pirtha," *Imaginary Maps*. Trans. Gayatri

- Chakravorty Spivak. New York: Routledge, 1995. 95-196.
- Gogh, Jacques Le. *History and Memory*. Trans. Steven Rendall and Elizabeth Claman. New York: Columbia UP, 1996.
- Grice, Helena. *Maxine Hong Kingston*. Manchester: Manchester UP, 2006.
- Griffiths, Jennifer. "Uncanny Spaces: Trauma, Cultural Memory, and the Female Body in Gayl Jones's *Corregidora* and Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*." *Studies in the Novel* 38.3 (2006): 353-70.
- Hwang, David Henry. *M. Butterfly*. New York: Penguin, 1989.
- Ishiguro, Kazuo and Kenzaburo Oe. "Wave Patterns: A Dialogue," *Grand Street* 38 (1991): 75-91.
- Kim, Elaine H. "Such Opposite Creatures: Men and Women in Asian American Literature." *Michigan Quarterly Review* 29 (1990): 68-93.
- Kingston, Maxine Hong. *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts*. New York: Knopf, 1976.
- . *China Men*. New York: Knopf, 1980.
- . *Hawai'i One Summer*. Honolulu: U of Hawai'i P, 1987.
- . *Through the Black Curtain*. Berkeley: The Friends of the Bancroft Library, U of California, Berkeley, 1987.
- . *Tripmaster Monkey: His Fake Book*. New York: Vintage, 1987.
- . *The Fifth Book of Peace*. New York: Vintage, 2004.
- . Ed. *Veterans of War, Veterans of Peace*. Kihei: Koa. New York: Knopf, 2006.
- Kobayashi, Fukuko. *Gender to Ethnicity de Yomu America Josei Bungaku: Shu-en kara Kyokai e [Reading American Women Literature through Gender and Ethnicity: From Marginality to Boundary]*. Tokyo: Gakugei-shorin, 2006.
- Lim, Jeehyun. "Cutting the Tongue: Language and the Body in Kingston's *The Woman Warrior*." *Melus* 31.3 (2006): 49-65.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Plume, 1988.
- . "Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature." *Michigan Quarterly Review* 28.1 (1989):123-64.
- . *The Bluest Eye*. London: Picador. 1993.
- Sato, Gayle K. Fujita, "Ghosts as Chinese American Constructs in Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*." *Haunting the House of Fiction: Feminist Perspectives on Ghost Stories by American Women*. Ed. Carpenter, Lynette and Wendy K. Kolmar. Knoxville: U of Tennessee P, 1991. 193-214.
- Skanadela-Trobley, Laura E, ed. *Critical Essays on Maxine Hong Kingston*. New York: G. K. Hall, 1988.
- Skenazy, Paul and Tera Martin, ed. *Conversations with Maxine Hong Kingston*. Jackson: U P of Mississippi, 1998.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of Vanishing Present*. Cambridge: Harvard UP, 1999.

- . *Other Asias*. Malden: Blackwell, 2008.
- . "Translation as Culture." *An Aesthetic Education in the Era of Globalization*. Cambridge: Harvard UP, 2012.
- Walker, Alice. *The Color Purple*. Orlando: Harcourt, 1982.
- Woolf, Virginia. *The Room of One's Own*, London: Grafton, 1977.
- Wu, Chia-rong. "Ghosting America: Cross Cultural Shadows in Maxine Hong Kingston's Memoirs." *Interactions* 20.1-2 (2011): 161-73.

《研究ノート》 案内表示におけるピクトグラムの記号論的考察

A Semiotic Study of Pictograms in the Guide Display

田 中 敦*

要旨

本稿では、施設等を表す案内表示に用いられているピクトグラム（絵記号）について、その情報伝達機能を分析するための観点を提示することを試みる。

ピクトグラムは視覚的な記号であり、一定のデザインによって施設等に関する情報を表すものであるが、そこには複数の記号原理が共存することが認められる。そこで本稿では、はじめにピクトグラムの情報伝達機能を支える記号原理を概観のうえ、その非言語コミュニケーション機能を分析するうえで必要なくつかの観点を提示する。

具体的には、(1) 類像性の観点から見る記号表現と指示対象との関係 (2) 類像性と約定性の相関関係 (3) 記号表現の構成性 (4) 記号内容のコンテキスト依存度、という4つの観点を挙げ、ピクトグラムによる情報伝達を総合的に分析するための指標として示すものである。

キーワード：ピクトグラム、非言語コミュニケーション、記号分類、類像性、約定性

1. 序論

生活の多様な場面で目にする機会の多いピクトグラム（絵記号）であるが、言語に依らず情報を視覚的に伝達し得る手段として、案内表示の用途でも広く使用されている。もともと日本国内では、1964年の東京五輪開催時にトイレや非常口などの位置を示すための図案が策定されたのを機に普及したものであり、近年では、訪日外国人観光客の増加に応じて、使用場面がさらに拡大している。また、2020年の東京五輪・パラリンピック大会の開催に向け、国際規格に合わせた標準化も図られ、2017年7月現在で152種類のピクトグラムが日本工業規格に登録されている。

記号の機能は一般に「別のあるものを指し示すもの」と定義される。案内表示に使用されるピクトグラムは、対象に関する情報を視覚的に表す記号体系であり、言語で表現すれば冗長となる情報を「一目で」表すことができ、さらに、言語の差異を超えて情報の送受信を可能とする有用なコミュニケーション手段である。

ただし、ピクトグラムは人工的に開発された記号体系であるため、記号表現であるデザインと記号内容である案内情報とは一定のコードによって恣意的に結ばれており、このコードを理解しない場合には、原則として情報の送受信は成立しない。そこで、コードによる約定性を軽減すべく、記号内容を類像的に反映したデザインの策定が専門家によって進められているのが現状である。

* TANAKA, Atsushi [非常勤講師]

しかしながら、そのデザインの研究は「わかりやすい」記号表現の開発面のみに偏り、記号内容と記号表現との関係性が十分に考慮されているとは言い難い。換言すると、受信者がピクトグラムという記号をいかに認知・解釈しているかという視点が欠落しているのである。これでは、いかにデザインを改訂しようとも、根本的な情報伝達機能の向上を図るには不十分な面が残る。真に重要なのは、記号原理を踏まえたうえで、記号表現と記号内容との関係性を多面的に問い直すことであると考えられる。

案内表示の実例を記号論の観点から分析した先行研究例として、社会記号論を提唱する研究者によるもの (Kress and Van Leeuwen 2006, Van Leeuwen 2005) や、英・カーディフ大学 (Cardiff University) 言語コミュニケーション研究センターの研究者によるもの (Jaworski and Thurlow (eds.) 2011) 等を挙げるができる。これらは主に記号が受信者に促す行動を分析したものであるが、本稿では受信者による記号の解釈の側面に焦点を当てることとする。

本稿の構成は、はじめに次章でピクトグラムが指示対象を表すうえでの記号原理を詳らかにしたうえで、そこで確認した記号原理に即しつつ、続く各章でピクトグラム分析の観点の提示を試みる。今回提示する観点は、(1) ピクトグラムが類像性によって表している指示対象は何か (2) 類像性はコードに依らず実現し得るか (3) ピクトグラムの意味は構成要素に還元可能か (4) 情報内容はコンテキストによって変動し得るか、の4点であり、これらを以て総合的なピクトグラム分析を行うための端緒としたい。

2. ピクトグラムの記号分類

ピクトグラムが記号である以上、そこには当然、指示対象が存在する。案内表示のピクトグラムは主に、施設・設備を指示対象として表すものと、特定の行為を表すものとに大別される。当該施設・設備がいかなる目的で使用されるものであるのか、また、当該施設等においていかなる行為が為されるのか、あるいは禁じられるか、といった情報を、視覚的記号によって表すのが、案内表示におけるピクトグラムの主要な機能であると考えられる。

こうした情報を言語に依らず直感的に理解してもらうため、ピクトグラムの記号表現は、指示対象と視覚的に類似させたデザインとなるように意図されているものが多い。図1から3はピクトグラムの実例であるが、いずれの記号表現にも、指示対象との類似性が認められる。

図 1.



【エスカレーター】

図 2.



【階段】

図 3.



【サッカー競技場】

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

図1ではエスカレーターの形状と利用者の姿が図案化されたうえで、運動の方向性が矢印によって表されている。図2では、階段の断面図の形状が描かれ、そこを上下に移動する人物が図案化されている。また図3では、球体を蹴る人物の姿勢が図案化され、それによってサッカー競技が

示されている。

指示対象との関係を踏まえて記号を分析したパース (C. S. Peirce) の分類法に則せば、図 1 から 3 はいずれも、類像性によって対象を指示する「アイコン (icon)」に該当する。視覚的類像性は、ピクトグラムのみならず、非言語コミュニケーションが成立するための重要な記号原理であると言える。

ただし、すべてのピクトグラムが類像性を内包するわけではない。図 4 から 6 は、類像性が認められないピクトグラムの例である。



(画像出所：図 4.5「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ、
図 6 平成 29 年 7 月 20 日付 経済産業省広報資料「案内用図記号の JIS 改正」)

矢印記号は、上述の図 1 でも運動の方向性を表す使用例があるが、そもそも運動の方向性は可視化される具象物ではなく、これを類像的に表示することは不可能である。また、矢印記号の機能に関しては、図表中の特定部位を指し示す「指さし機能」、運動の軌跡を表す「運動／変化の表象機能」のみならず、受信者に現実世界での行動を促す機能が指摘されている (伊藤 2016)。

実際に案内表示で図 4 のような矢印記号が表示される際には、他のピクトグラムとともに用いられ、矢印が示す方向に当該施設が存在することを示す場合が多い。これは、記号が現実空間の位置関係を指標的に指示するものであり、パースの記号分類では「インデックス (index)」に該当する。インデックスにおける記号と指示対象の関係は有契的なものであり、アイコンにおける類像性とは異なる記号原理を内包する。

図 5 および 6 の記号表現もまた、不可視的な抽象概念を視覚的に描いたものであり、そこに類像性は存在しない。図 5 では「リサイクル」という再利用の概念を 3 つの矢印の組み合わせで表しており、図 6 では電波の波動という不可視の概念を図案化しているが、これらの記号と指示対象との関係性は完全に恣意的である。つまり、図 5 および図 6 のデザインとそれが表す指示対象とは、コードという約定性によって結ばれており、これはパースの記号分類では「シンボル (symbol)」に相当する。

ここまで見たように、等しくピクトグラムであっても、その記号表現と記号内容との関係性を支える記号原理は一律のものではなく、類像性、指標性、約定性、およびそれらの組み合わせによって、ピクトグラムは情報伝達を行うものと認められる。このことを確認したうえで、次章からは、ピクトグラムの記号性を分析するための観点の提示を試みる。

3. ピクトグラムの類像性

はじめに検討するのは、ピクトグラムは視覚像によって何を表そうとしているのか、という点

である。

前述の図1は、エスカレーターという設備の形状を類像性によって表しているとも見ることが出来る。しかしながら、そこで重要なのは、矢印記号が併用されることにより、動きの方向性が示されている点である。つまり、図1のピクトグラムは、単に指示対象設備の形状を表すのみならず、その機能を示したものだと言える。

図2においても、もし階段の断面という施設の形状を表すことのみが目的であれば、人物の図案は不要となる。そこに人物が歩行する図案を加えたことの意味は、歩行によって上下階への昇降を可能とする機能性を示すものと考えられる。

このように案内表示においては、指示対象の形状や構造的性を示すことが主たる目的ではなく、その機能性を表しているものが多い。図3が典型的な例で、ピクトグラムが表すのはサッカー競技場の形状ではなく、その施設で行われる特定の競技であり、そのために身体性による類像性が用いられている。たしかに、競技場という施設の形状を類像性によって表したところで、施設案内としての情報度は高いとは言えないであろう。案内情報として重要なのは、当該施設や設備がどのような用途で使用され得るかを伝達することにあると考えられる。

この観点から、改めてピクトグラムのデザインを見てみると、類像性の細部に盛り込まれた意図を認めることができる。

図 7.



〔非常口〕

図 8.



〔くず入れ〕

図 9.



〔コインロッカー〕

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

図7は施設で目にする事の多い非常口のピクトグラムであり、通常、白地に緑色の配色で表示されている。開いた空間を走り抜ける人物が図案化されているが、これもまた、緊急時に外部への脱出を可能とする機能性を示したものである。ここで人物像の足元に注目すると、足の影に相当するものが描かれていることに気づく。影が生じるのは光線が当たるためであり、開口部から外光が差していることが示されている。つまり、このピクトグラムが表しているのは、当該空間が施設外部につながっているという事実なのである。

図8のピクトグラムは、ゴミを捨てるための設備を表すものであるが、その設備の形状がバケツ状であることに意味はない。ここでは、ゴミくずを廃棄するために使用する設備の機能性を示すうえで、人物像の手元の下部に3片の印が記されており、その小ささと断片性が不要物を想起させるものとなっている。

なお、施設および設備の機能性は人物像の身体性によって示されるばかりではない。図9はカバンとそれを取り囲む四角形、そしてその上方に記された鍵の図案の組み合わせによって、コインロッカーを表している。このピクトグラムに人物像は用いられていないが、ここでもやはり、

情報として示されているのは施錠して荷物を保管するという機能であり、この機能性を表すため、荷物、閉鎖空間、鍵、といった要素が類像性によって示されているのである。

ここまで見たのはごく一部の例であるが、実際に多くの案内表示においては、指示対象施設等の機能性を表すことが目的とされている。施設および設備は人間が使用するものである以上、それらの利用可能性に関しては、身体像によって行動を類像的に表したものが多く認められるが、必ずしもそればかりではない。この類像性が表す機能性に注目したうえで、ピクトグラムを分類することが、その情報伝達を詳細に分析する出発点となるものと考えられる。

4. ピクトグラムの約定性

続いて検討するのは、前章でも見たピクトグラムの類像性が、どこまで自律的に成立し得るものであるか、という点である。換言すると、ピクトグラムの類像性はコードに依らずに成立しているのか、ということになる。

まず、原則から言えば、ピクトグラムは視覚的類像性を活用しているが、その記号性はやはりコードによって支えられており、当該コードを理解しない受信者が正確な意味を解読することはできないものである。その意味ではピクトグラムもまた、言語記号と同一の記号原理を有している。しかし、このコード依存性を可能な限り低減し、非言語コミュニケーションの手段となることもまた、ピクトグラムの使命であると言える。

では、ピクトグラムにおける記号表現と記号内容との結びつきが、どこまでコードに依らずに成立し得るかを、事例に基づいて考察してみたい。

図 10.



【お手洗】

図 11.



【喫煙所】

図 12.



【飲料水】

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

トイレを表す図 10 のピクトグラムは、向かって右に男性、左に女性が図案化され、中央に仕切り線が配されている。これによって、男性用と女性用が区分されている施設であることが示されており、そうした施設はトイレに限定されるわけではないが、慣習的にこの図案はトイレを表すものとして使用されている。この施設限定性にもコードの介在を見て取ることが可能であるが、ここではそれよりも、男性と女性を表す図案の方に注目したい。

この男女を表す図案は、組み合わせの中で用いられるばかりでなく、周知のとおり、それぞれ独立して男性、女性を表すものとして使用されている。両者の差異はシルエットの違いによって示されており、両性を区別するために、女性は腰部が細くスカートを身に着けた図案となっていることがわかる。この際、女性の腰部の細さは生物学的な性差の特徴であるが、着衣という社会的な要素を取り入れている点に、類像性を超えた約定性を見ることができる。つまり、特定の着

衣の形状が女性を表すことはコードによる約束事に過ぎず、このコードを了解しない受信者は、指示対象を解読することができないのである。

次に、喫煙所を表す図 11 で用いられているのは、人物が喫煙している姿ではなく、煙の出るタバコが図案化されている。ただし、その図案がタバコであるとはわかるのは、我々がコードに基づいて記号を解読しているためと考えた方が妥当である。図 11 の図案自体は、たとえば煙を出す工場を図案化したものと見てもおかしくはなく、類像性のみを根拠に考えれば、多義的な解釈を可能とする。その中で、そこに描かれたものをタバコと理解し、さらに、タバコの販売ではなく喫煙という行為を理解することができるのは、恣意的に結ばれた記号表現と記号表現の関係性を、我々がコードとして理解しているからに他ならない。

さらに、飲料水を表す図 12 では、水道の蛇口と水の入ったコップが図案化されている。しかしながら、これを類像性によってのみ解釈すれば、妥当な解釈は「給水施設」ということになるであろう。このピクトグラムが飲料水を表すことを理解するためには、やはりコードを知っておく必要がある。そもそも水道から出る水が飲用に適するというのは海外では一般的でなく、むしろ類像性によって解釈すると、飲用には適さないとの理解が得られても不思議ではない。その記号内容を飲料水と解読するためには、やはり約定性が根拠となるのである。

このように、類像性によって対象を指示しているかに思われるピクトグラムであるが、やはりコードなくしては成立することができない。つまり、コードを理解しない受信者はピクトグラムから正確な情報を解読し得ないこととなる。このことを踏まえたうえで、さらにどこまで類像性を求めるかを考えることが、ピクトグラムの情報伝達機能を分析する際には不可欠である。

5. ピクトグラムの構成性

ピクトグラムの中には、複数の構成要素に分解可能なものが存在する。全体の意味が、それらの構成要素の意味の和として成立する場合、そこに構成性が存在すると言える。

まず、わかりやすい例として、各種禁止行為を表すピクトグラムについて確認してみたい。

図 13 のピクトグラムは、通常、白地に赤で表示され、一般的な禁止事項を表すものであるが、これが単独で使用されるのは例外的であり、他のピクトグラムと組み合わせて使用されることが多い。たとえば、喫煙所を表す図 11 と組み合わせた図 14 は禁煙を表し、飲料水を表す図 12 と組み合わせた図 15 は非飲料水を示す、といった具合に体系的に意味が合成されている。

しかし、当然のことながら、すべてのピクトグラムが体系的な構成性に基づいているわけではなく、複数の原理が混在していることを示す例も存在する。

図 13.



[一般禁止]

図 14.



[禁煙]

図 15.



[飲めない]

図 16.



[立入禁止]

図 17.



[捨てるな]

図 18.



[レストラン]

(画像出所：「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ)

図 16 は立入禁止区域を示すピクトグラムであるが、禁止を表す図案と組み合わせられているのは、「男性」を表す図案である。よって、構成性に基づいて考えれば、これは「男性禁止」と解釈され、女性専用の施設等を示すものとするのが妥当となる。もちろん、立入禁止を表すうえで両性を併記する必要性はなく、男性の図案を以て両性を代表したものと考えられるが、その場合であっても、立入を表すような動作を示す図案を用いれば、より直感的な理解が可能であると思われる。問題は、男性を表す図案として存在するものが、他の記号と合成されることで意味を変化させてしまっている点にあり、図 14 や 15 のように意味を継承しているものと併存する点で混乱を招きかねない。

次の図 17 では、手と紙屑の図案が禁止の図と合成されることでゴミの廃棄禁止が表されており、このピクトグラム自体は、非常に理解しやすいものの一つであると思われる。しかし、構成性という観点から見た場合、ゴミ廃棄用設備に関しては前述の図 8 のピクトグラムが存在しており、これと異なる図案が用いられている点で体系の一貫性が損なわれている。厳密に考えれば、ゴミ廃棄用設備と廃棄行為禁止とは対立概念ではないのかもしれないが、一考の価値があるものと思われる。

図 18 は禁止を表すものではなく、飲食店を表すピクトグラムである。図案の中に店舗を表す要素は存在せず、食事の際に使用する道具の図案が用いられているのみであるが、飲食用の道具によって飲食店を表すというメトニミーに基づく意味が実現している。これに対して、後述するコンビニエンスストアを表すピクトグラムでは、店舗であることを表す要素として、建物の屋根を模した要素が図案として存在する。同じく店舗を表すものであれば、レストランにおいても同様の要素を付すことも考えられ、さらに、レストランに限らず、喫茶店、バーなどの飲食施設、薬局や理容店など商業施設を表すピクトグラムでも、等しく店舗であることを示す要素を組み合わせることで、統一的な理解が可能になるものと思われる。

構成性が適用される記号体系においては、単位の経済性が実現し、限られた記号表現によって複合的な意味を表すことが可能になる。しかしながら、ピクトグラムの視覚像は機械的に合成することに限界もあり、効果的な情報伝達のために体系全体を考慮する必要がある。

6. ピクトグラムのコンテキスト依存度

最後に検討するのは、ピクトグラムとそれが使用される場面との関係性についてである。ここまでのピクトグラムのデザインが特定の指示対象を表すうえでの記号原理として、類像性、約定

性、構成性について考察したところであるが、実は記号の使用環境もまた、意味の解釈に影響を与え得ることを確認したい。

たとえば前述の図 11 が喫煙を表すうえでは、ピクトグラムが表示されている空間が限定的に認識される必要がある。空間的限定が不明なままで図 11 が用いられた場合、記号の受信者には喫煙の可否が判断できず、記号内容が無意味なものとなる。

また、たとえば図 2 の階段の図案が階段の前に表示されていた場合、現実の階段を見れば昇降可能な施設であることはピクトグラムに依らずとも一目瞭然であり、それ以外の意味を求めてしまうことになりかねない。図 2 は扉の前などに表示されることによって、その扉の向こうに昇降可能な設備があることを示す案内表示として機能するものである。

図 19.



〔温泉〕

図 20.



〔コンビニエンスストア〕

図 21.



〔切符売場／精算所〕

(画像出所：図 19, 21「公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ、
図 20 平成 29 年 7 月 20 日付 経済産業省広報資料「案内用図記号の JIS 改正」)

さらに、図 19 のピクトグラムは温泉の湯気を図案化したものであるが、外国人にとっては「暖かい料理を提供する飲食店に見える」とも伝えられている¹(2017 年 5 月 9 日 読売新聞朝刊 スポーツ面)。実際に、店舗の前に図 19 が表示されていたとすれば、湯気の上がる料理皿という解釈も妥当なところであり、使用場面との関係で多義的な解釈を許容するものと思われる。

図 20 のピクトグラムは、2017 年 7 月に日本工業規格に登録されたものであるが、飲食料品のうえに屋根の形状を模した図案を配したデザインは、店舗に対して表示されることによって飲食料の購入可能性が解釈され得るが、同一のデザインが公共空間で使用されれば、単に飲食可能な空間を示すものと解釈されても不思議はないと思われる。

同様に図 21 も、これが切符売場あるいは精算所であると理解するうえでは、人物が手にしている物体が切符であり、左側の図案が券売機／精算機を表すものと認識する必要があるが、そのためには、このピクトグラムが駅構内に表示されていることが必要である。ピクトグラムのデザイン自体は、表示される場所によっては、自動販売機やバス停留所などと解釈される可能性のある多義的なものと考えられる。

以上はあくまで一例であるが、ピクトグラムの多義性を限定する役割が、記号が使用されるコンテキストという、記号外部の要素によって担われていることが確認できる。コンテキストによって記号の多義性が限定される現象は、言語記号をはじめ広く認められる原理であるが、ピクトグラムの分析に際しても、使用環境との関連性を踏まえることが有用と思われる。

¹ こうした誤解を避けるため、温泉を表すピクトグラムに関しては、2017 年 7 月の改訂時、国際標準化機構の規定に即して、人物の図案入りのものの併用が認められた。

7. まとめ（ピクトグラムの情報伝達機能の分析に向けて）

本稿では、案内表示の用途で使用されているピクトグラムを視覚的な記号と捉え、その記号原理を確認したうえで、ピクトグラムの情報伝達機能を分析する際に有用と思われる、いくつかの観点の提示を試みた。

まとめると、ピクトグラムは類像性、指標性、約定性という記号原理によって、主に対象施設等の機能性を表すものとして用いられている。ピクトグラムにおける記号表現と記号内容との関係は原則として約定性に基づくものであるが、類像性や構成性を組み合わせることによって、コードを知らない受信者にも直感的に理解できるように工夫が為されている。ただし、ピクトグラムの意味を理解するうえで、それが使用されているコンテキストも影響を有しており、使用状況の違いによって多義的に解釈され得るものも存在する。

本稿で取り上げたのは限定的な事例であるが、さらに観点を精査のうえ、より広範な事例からピクトグラムの情報伝達機能を分析することを今後の課題とする。

画像出所

公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団」ホームページ

http://www.ecomo.or.jp/barrierfree/pictogram/picto_top2017.html（最終閲覧日：2017年11月30日）

経済産業省ホームページ

<http://www.meti.go.jp/press/2017/07/20170720002/20170720002.html>（最終閲覧日：2017年11月30日）

参考文献

- 有馬道子（2001）『パースの思想』岩波書店。
- 石田英敬（2003）『記号の知／メディアの知』東京大学出版会。
- 伊藤未明（2016）「スーパーモダニティの修辞としての矢印記号」、日本記号学会編『叢書セミオトポス 11 ハイブリッド・リーディング』新曜社、200-220。
- 柏木博（1992）『デザインの20世紀』日本放送出版協会。
- 高橋揚一（2004）『デザインと記号の魔力』勁草書房。
- 田中敦（2015）「広告における視覚的レトリックの認知研究」、『現代社会文化研究』第61号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、293-309。
- 田中敦（2017）「視覚記号としての身振りの記号論的考察」、『新潟国際情報大学 国際学部 紀要』第2号、27-40。
- アイヴィンス、ウィリアム（1984）『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』白石和也訳、晶文社。（William M. IVINS, Jr., *Prints and Visual Communication*, Harvard University Press, 1953）
- バージャー、ジョン（2013）『イメージ 視覚とメディア』伊藤俊治訳、ちくま学芸文庫。（John BERGER, *Ways of Seeing*, Penguin Books, 1972）
- ベルタン、ジャック（1982）『図の記号学 - 視覚言語による情報の処理と伝達 -』森田喬訳、財団法人地図情報センター（Jacques BERTIN, *La Graphique et le Traitement Graphique de l'*

information, Flammarion, 1977)

ムナーリ, ブルーノ (2006) 『デザインとヴィジュアル・コミュニケーション』 萱野有美訳, みすず書房. (Bruno MUNARI, *Design e Comunicazione visiva*, Guis. Lateza & Figli S.p.a, 1968)

Jappy, T. (2013) *Introductions to Peircean Visual Semiotics*, Bloomsbury.

Jaworski, A. and C. Thurlow (eds.) (2011) *Semiotic Landscapes; Language, Image, Space*, Continuum International Publishing Group.

Kress, G. and Van Leeuwen, T. (2006) *Reading images : the grammar of visual design*; Second edition, Routledge.

Van Leeuwen, T. (2005) *Introducing Social Semiotics*, Routledge.

編集後記

新潟国際情報大学国際学部紀要第3号が無事刊行の運びとなりました。創刊準備号を含めるとこれで4号ということになり、まずは一巡した形となります。21人の専任教員で紀要を毎年刊行していくのはそう簡単なことではないのですが、非常勤の先生方にも執筆をお願いしていることもあり、国際学部らしい多様な分野の論文がこれまで掲載されてきました。今号には専任教員による論文が2編、非常勤講師による論文が2編の計4編が掲載されましたが、いずれも興味深い内容の論考となっております。

今後は、若手の方々からの投稿も期待したいと思います。

発刊にあたって編集作業を円滑に進めていただいた総務課の山田裕貴さん、(株)タカヨシの西条由宇さんには感謝の意を表します。

新潟国際情報大学国際学部学部長 澤口 晋一

新潟国際情報大学 国際学部 紀要【第3号】

発行日 2018年4月1日
編集者 紀要編集委員会
発行者 新潟国際情報大学 国際学部
〒950-2292 新潟市西区みずき野3丁目1番1号
TEL.025-239-3111 FAX.025-239-3690
E-mail somu@nuis.ac.jp
URL <http://www.nuis.ac.jp>

印刷者 株式会社タカヨシ
〒950-0141 新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21
TEL.025-381-2000 FAX.025-381-4800

ISSN 2189-5864